



TITLE:

北宋末の宣和殿：皇帝徽宗と學士蔡攸

AUTHOR(S):

藤本, 猛

CITATION:

藤本, 猛. 北宋末の宣和殿：皇帝徽宗と學士蔡攸. 東方學報 2007, 81: 1-68

ISSUE DATE:

2007-09-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/71053>

RIGHT:

北宋末の宣和殿——皇帝徽宗と學士蔡攸——

藤 本 猛

はじめに

第一章 宣和殿と保和殿

第一節 その沿革と諸殿の關係

第二節 宣和殿の機能

（一）文化的機能

（二）政治的機能——御筆作成と睿思殿文字外庫使臣

第二章 蔡京一族と宣和殿

第一節 宣和殿學士の設置——兼論直宣和殿

第二節 徽宗と蔡攸

おわりに

はじめに

北宋末、女眞・金國が二路に分かれて南進を開始すると、それを察知した宦官・童貫は太原から開封に逃げ歸り、途中入手した女眞の牒文を持ってその他の大臣らと「宣和殿」を訪れ、皇帝徽宗にその牒文を進呈する。それを見た徽宗はあまりのショックに言葉を失い、眼には涙を浮かべていた。その牒文は、女眞が宋への攻撃を開始するに当たったの檄文であり、宋側から見れば甚だ不遜な内容であったのだ。彼は言う。「朕は少し休みたい。そなたらは今晚また來られよ。その時相談しよう」と。

その夜、改めて大臣らが「玉華閣」に参上すると、宇文虚中と吳敏の二人の先客が来ていた。徽宗は「まず二人と對面するので、そなたらは待つておれ。」と言う。虚中・敏が順に對面を行い、ようやく大臣らが召された。すると徽宗は突然めまいを起こして前後不覺の状態となり、座つていた御牀から轉がり墜ちた。お附きの者らが急いで人を呼んで助け起こし、ともかくも「保和殿の東閣」に運び入れた。群臣が協議して、まず煎じ藥を飲ませると、ようやく意識をとり戻した。徽宗は腕を擧げて紙と筆を求め、左手で文字を記した。「朕の半身はもう駄目だ。こんな身體でどうしてこの大事をうまく處理することができようか。」大臣らはそれを見たが、誰も言葉を發しなかった。そこで徽宗は「諸公はどうして何も言わないのか。」と書く。お附きが振り返つて見せたが、やはり大臣らに應ずる者はいなかった。仕方なく徽宗は「皇太子を皇帝位に即かせるべし。予は教主道君として龍德宮に隱退する。」と自ら書いて示した。そして外で待たせておいた吳敏について「朕が自ら拔擢した者だ。呼び出して詔を作らせよ。」と言うと、すぐさま吳敏が入室し、すでに詔の草稿は準備されていた。かくして皇太子を召し出し、澀る太子に大臣らが御袍を着せて欽宗皇帝の誕生となる。時に宣和七年（一一二五）十二月二三日であつた。^①

以上は徐夢莘『三朝北盟會編』（以下、『會編』と略稱）に載る徽宗讓位の顛末である。その後上皇となつた徽宗は十日ほど経つた翌・靖康元年一月三日の深夜、數人の供を連れてこつそりと開封城を抜け出し、江南の方へ行幸に出るのだが、以來徽宗の半身が不隨であるとの記事は見當たらぬ。この禪讓劇において徽宗が假病を使い、吳敏がその芝居に一枚かんでいたであろうことはほぼ間違ひなく、大臣らの沈黙はこの劇を目的にしたりした彼らの心理を雄辯に物語っている。

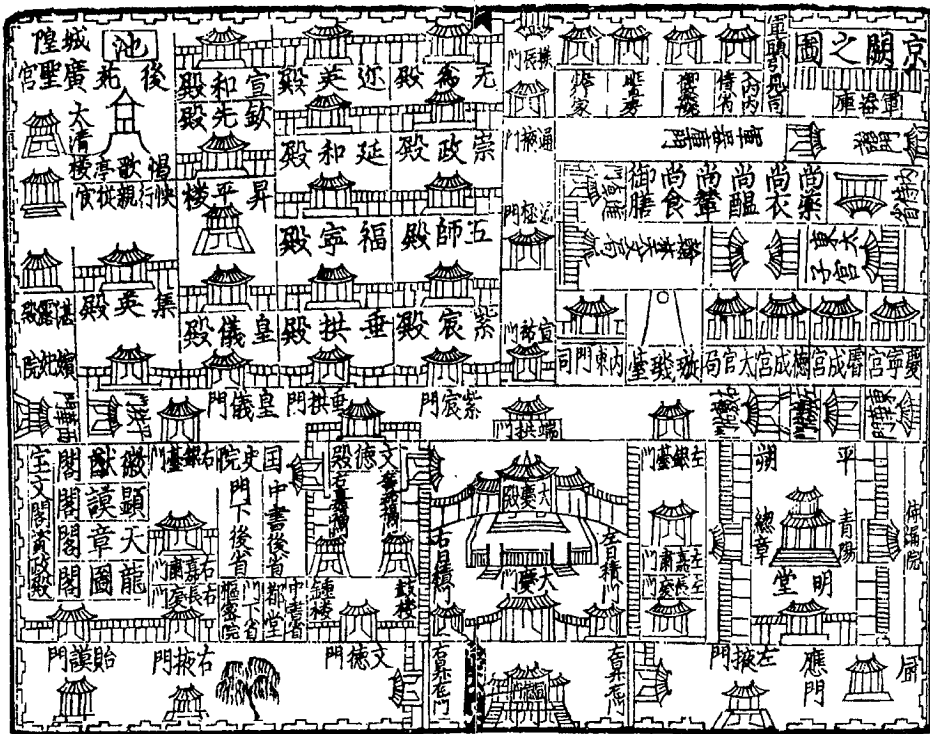
いまここで注目したいのは、この劇の舞臺が「宣和殿」と「玉華閣」「保和殿の東閣」であることだ。後に見るようにこれらの殿閣はほぼ同一の建物といつてもよい配置關係にあり、いわゆる「宣和殿」あるいは「保和殿」という名で

總稱される場所である。

その位置は開封宮城内の西北隅にあり、いわゆる「禁中」の中でも最奥に位置する。皇帝は日常的に禁中において宰相・大臣らと「視朝」を行うが、それは同じ禁中でも外朝に最も近い前殿Ⅱ垂拱殿と、それより少し奥にある後殿Ⅱ崇政殿あるいは延和殿で行われており、禁中とはいえ公的な性格を有した場所であった。^②これら禁中の東南部に對して、北西部は完全に皇帝の私的空間であり、恩典による賜宴以外、宰相であつても普段は立ち入ることの許されない場所であつた。その最奥に位置した宣和殿において、帝位禪讓のような國策に關わる重大決定が行われたことは、一般的な宋朝の政治過程の認識からは、相當の違和感が残ると言わざるを得ない。そこには徽宗朝という時代の持つ特異性が凝縮しているといえる。

そこで本稿では宣和殿という場が持つ政治的意味合いについて考察を行う。

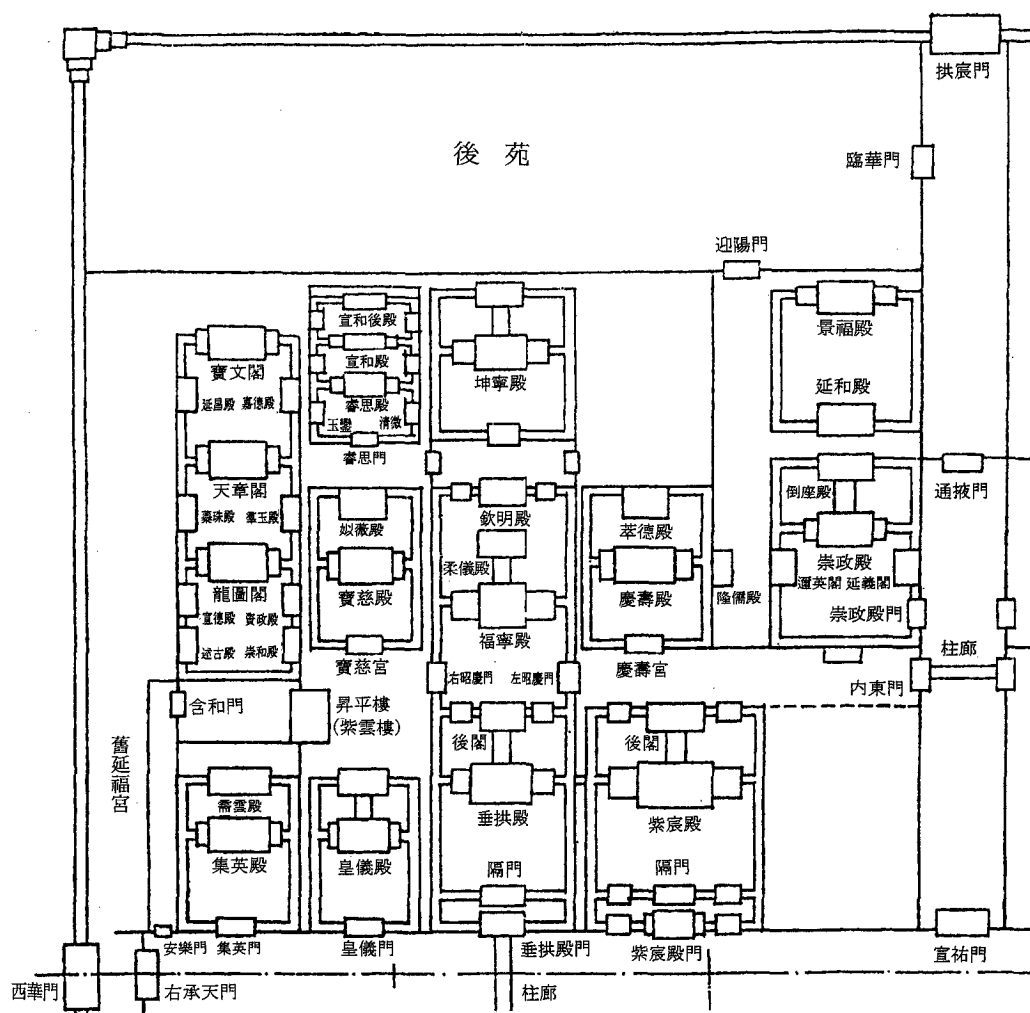
徽宗時代の宣和殿については、彼の趣味の館として史上名高いにもかかわらず、美術史や文化史の方面から表面的に言及されることはあつても、それを正面から取り上げたものはなく、その構造についても非常に曖昧なままで残されている。代表的な北宋開封の研究としては、周寶珠『宋代東京研究』（河南大學出版社、一九九二年）や考古學の成果を取り入れた劉春迎『北宋東京城研究』（科學出版社、二〇〇四年）があるが、本稿が注目する宣和殿の詳しい位置、沿革については深く検討せず、圖としては傳存史料として宋代開封城を示す唯一の地圖である元・至順刊本『事林廣記』後集「宮室類」の「京闕之圖」を示すに止まる（圖1）^③。一歩進んで比較的詳しい開封禁中の宮殿配置圖を提示するのは傳熹年で（『山西省繁峙縣巖山寺南殿金代壁畫中所繪建築的初步分析』『建築歷史研究』第一輯、一九八二年。のち『傳熹年建築史論文集』文物出版社、一九九八年）、郭黛姮主編『中國古代建築史』第三卷「宋、遼、金、西夏建築」（中國建築工業出版社、二〇〇三年）もこれを採用しており参考に値するが（圖2）、いずれも宣和殿・保和殿の關係についてはほとんど論及がない。日本



【圖1】元・至順本『事林廣記』の北宋開封宮殿東京城圖

では久保田和男氏が北宋開封についての優れた研究をまとめられ、その第四部に徽宗朝の首都改造を取り上げられるが、やはり宣和殿の細かな配置等に深く立ち入ってはおられない。そこで本稿の第一の目的として、まず宣和殿に關わる記録を整理し、それがいかなる様式にあつたのか、そしてどのような機能を有していたのかを解明する。

第二の目的としては、宣和殿に置かれた館職の持つ特異性を確認し、そこに深く關つた蔡攸について、主に彼と皇帝徽宗との關係を中心に考察を行う。從來、徽宗朝に對する研究は經濟や文教といった諸政策に對するものがほとんどであり、それも當時の「專權宰相」蔡京をめぐるものであつた。^⑤その中で、やはり蔡京を主眼としたものだが、徽宗朝における政治的な動向、特に皇帝との關係を取り上げた研究として林大介氏の研究が存在する。^⑥本稿も蔡京と徽宗との關係を考察するという意味では氏の研究に連なるものだが、氏が蔡京を前面にたて、いわば政治の表舞臺を考察對



【圖2】『傳熹年建築史論文集』の北宋開封宮殿圖西北部分（296頁）

象としたのに對し、本稿は禁中の宣和殿という「場」とそこに設けられた制度に見える蔡京の息子、蔡攸に注目することとで、徽宗朝政治史の裏舞臺を覗こうとするものである。^⑦

以上の二點を考察した上で今一度ここに見た禪讓劇に戻り、この禪讓劇に祕められた眞の意味を解き明かしてみたいと思う。

第一章 宣和殿と保和殿

第一節 その沿革と諸殿の關係

宣和殿の沿革について簡にして要を得た説明がなされるのは、王應麟の『玉海』卷一六〇・宮室「熙寧睿思殿へ延春閣」宣和殿」であり、それを基にすれば

神宗・熙寧八年（一〇七五） 睿思殿造營。

哲宗・紹聖二年（一〇九五） 四月二日 睿思殿の後方に宣和殿造營。（のち元祐年間に解體）

徽宗・大觀二年（一一〇八） 四月 宣和殿を再建。徽宗「御製宣和殿記」。^⑧

重和元年（一一一八） 宣和の後殿が完成。

宣和二年（一一二〇） 年號と重複することから、保和殿と改稱。^⑩

と一應は整理することができる。ここからすれば、まず神宗が睿思殿を造ったが、哲宗は父を尊崇する意からこれを使用せず、後方に新殿を建てた。これが宣和殿の始まりであり、元祐期に一度取り壊された後、徽宗が再建し使用した。宣和年間に入ると、宣和殿は年號と名稱が重なることから保和殿と改稱された。すなわち宣和殿＝保和殿だということ

になる。おそらくこれが一般的な認識であろう。

しかし蔡條『鐵圍山叢談』巻四では

宣和殿の後ろ、又た保和殿なる者を創立し、左右に稽古・博古・尙古等諸閣有り、咸な以て古玉印璽を貯め、諸もの鼎彝禮器、法書圖畫は盡く在り。^⑪

とし、保和殿は宣和殿の後方に造られたもので、両者は別の建物であるという。「はじめに」で見た宣和七年の禪讓劇においても、宣和殿と保和殿は別の建物として登場している。他にも『宋史』では

（政和三年）夏四月戊子、保和殿を作る。（巻二一・徽宗本紀）

保和殿、政和三年四月に作り、九月に殿成り、總じて屋七十五間爲り。（巻八五・地理志・京城）

といい、陳均『皇朝編年綱目備考』でも巻二八・政和三年九月「保和殿成」の記事に續けて「始於四月癸巳、至九月丙午殿成。」^⑫「總爲屋七十五間。」^⑬といっており、宣和殿を改稱したとは言わず、保和殿は、政和三年（一一三）四月に着工、同年九月に竣工したとする。これでは宣和二年に改稱を行う七年も前に、保和殿が既に存在しているということになる。

加えて更に事態を複雑にしているのが、『宋史』巻二一・徽宗本紀に

（宣和元年）九月甲辰朔、蔡京を保和新殿に燕す。

といわれる「保和新殿」の存在である。王明清『揮麈後錄餘話』巻一に載る蔡京の「保和殿曲燕記」はおそらくこのときの宴の模様を綴ったもので、その文中には「落成於八月」と見え、この「保和新殿」は宣和元年（一一九）八月に落成した建物であったことが知れる。^⑭

すなわち政和三年九月に出来た「保和殿（A）」と、宣和元年八月に出来た「保和新殿（B）」、それにもととの「宣

和殿(C)」、重和元年の「宣和後殿(D)」がそれぞれ存在し、都合四種の殿の關係がはつきりせぬまま残されているのが現状である。¹⁴⁾

これら諸殿の關係解明のために、まずなされねばならないのはそれぞれの内部構造の把握、比較である。幸いにして先にも挙げた史料、王明清『揮麈錄』には、いづれも蔡京の手になるという「太清樓特宴記」(史料I)と「保和殿曲燕記」(史料II)という二つの文章が残されている。¹⁵⁾少々煩雑ではあるが、まず史料I「太清樓特宴記」から見ていこう。

これは政和二年三月における宣和殿(C)についての記録である。¹⁶⁾徽宗は同月復権した蔡京のために禁中後苑の太清樓に宴を張った。蔡京はその際、隣接していた宣和殿(C)を見る機会を得たのである。

當日、徽宗は「政務は怠れぬ」として垂拱殿で視朝を行ったのち、蔡京らを伴って崇政殿に移り、弓馬所子弟の武藝・弓術、宮人の蹴鞠を鑑賞した。その後いよいよ景福殿の西牆から苑門(後苑の門か)をくぐった。そのとき徽宗は蔡京に「ここからわずかで宣和(殿)だ。かつて言者らが「金の柱、玉の戸」(でできた贅澤な建物)と言つて宮禁を非難したやつよ。そなたの子の蔡攸を案内につける故、入つていつて觀てまいれ」と言う。これを受けて蔡京は東に小花逕に入り、南に碧蘆叢を過ぎ、東の便門入つて宣和殿に到着した。建物は三楹のみで、左右に挾屋があり、中に圖書・筆硯・古鼎などの青銅器が陳列され、その陳列臺と椅子は黒い漆で塗られていた。垂木は朱で、棟木は緑、ともに文様は無い。東西の廊下にもそれぞれ殿があり、やはり三楹ずつ、東は瓊蘭といい、石が積まれて山となっており石穴から泉が出ていて、沼の北側に注いでいる。「靜」という宸筆の牌榜が掲げられ、時折り心を洗い清める場である。西は凝方(芳)といい、後ろには積翠、南に瑤林、北洞は玉宇という。石が壁から突き出て屹立し、花や木が茂っている。後ろに沼があつて環碧といい、傍らの亭榭は臨漪・華渚という。沼に續いて山があり、その殿は雲華、閣は太寧という。左の登り路を登ると、道すがら亭が四つ、琳霄・垂雲・騫鳳・層巒があり、それほど高峻なわけではないが、峻しい崖

を俯瞰すれば、まるで深山大谷のようである。續いて會春閣があり、下には玉華殿がある。玉華殿の傍らに「三洞瓊文之殿」との榜があつて、道教の教義を尊崇する。旁らに種玉緣雲軒があつて對峙している。⁽¹⁷⁾

以上がⅠ「太清樓特宴記」に見える宣和殿(C)の状況である。事の發端は徽宗の言葉を聞く限り、言者が派手さを批判した宣和殿が實際にはそうでないことを徽宗が示したことにあり、だからこそ蔡京は文章を作つて、宣和殿の瀟洒でシックな感じを大いに喧傳せねばならなかったものと思われる。その産物がこの「太清樓特宴記」であらう。⁽¹⁸⁾ またその口吻から、蔡京にとって宣和殿(C)は初めて訪れる場所であり、逆に彼の息子蔡攸はその道案内を命じられるほど禁中の地理に詳しくかつたことは注目に値する。

この文章から宣和殿(C)の特徴・ポイントを抽出すれば、

(一)宣和殿本殿は三楹、左右に挾屋あり。

(二)東廊に瓊蘭殿がある。築山(假山)があつて泉水が沼まで流れ出ている。

(三)西廊に凝芳殿があり、北に積翠殿、南に瑤林殿、北洞は玉宇という。

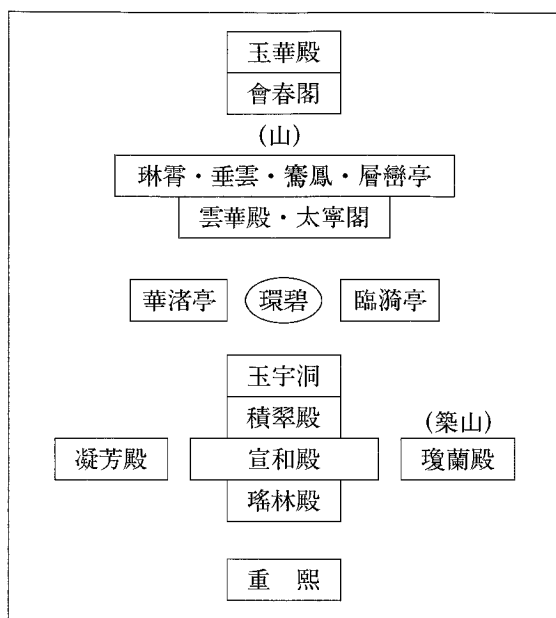
(四)北に環碧という沼があり、そばには臨漪亭・華渚亭がある。

(五)更に北には山があつて、雲華殿・太寧閣がまずあり、左の登山道を行けば琳霄亭・垂雲亭・鸞鳳亭・層巒亭が續く。

(六)續いて會春閣、山下に玉華殿がある。「三洞瓊文之殿」の榜と種玉緣雲軒がある。

以上の六點が挙げられるであらう(圖3)。⁽¹⁹⁾ 瓊蘭殿・凝芳殿・環碧の名は『宋史』地理志の記事にも見え、兩者が同じ宣和殿(C)を指していることは間違いないであらう。

宣和殿本殿は三楹、すなわち桁行三間で、一間約五メートルとして三間十五メートル、左右の挾屋を入れてもせいぜい三〇メートルである。それほど大きな建物ではなく、しかもシックな色合いであつたというから、瀟洒な趣味の館と



【圖3】「太清樓特宴記」(史料I)に見える宣和殿(C)の配置

いった感じの建物であった。

それではつづいて史料II「保和殿曲燕記」を見てみよう。

宣和元年九月十二日、徽宗は蔡京・王黼・童貫・蔡攸らと宗室を招き、保和殿に宴を催す。まず文字庫にて食事を賜ったのち、臨華殿門から内へ入り、東曲水において蔡京らは整列、玉華殿で謁見を行う。徽宗の先導で一行は西曲水を歩き、醑醑架を回って、太寧閣に至り、層巒亭・凌霄亭・鸞鳳亭・垂雲亭に登る。そこで景色を楽しんだのち、ようやく保和殿にたどり着く。殿は三楹で、一楹に七十架、二つの挾閣があるが、彩色は華美すぎることではない。八月に落成したもので、竹や桧が用いられている。真ん中の一楹には御榻が

置かれ、東西の二楹には古鼎や器玉が陳列されている。左の挾閣は「妙有」と言い、經・史・子・集の書物が、右は「宣道」と言い、道家の書と「神霄諸天の隱文」が藏されている。帝は前を歩き稽古閣に行く。ここには周・宣王の石鼓がある。⁽²⁰⁾ 續いて遼古・尙古・鑑古・作古・傳古・博古・祕古の諸閣を巡り、祖宗の訓誨や三代の古器、漢晉隋唐の書畫を徽宗の解説付きで鑑賞した。玉林軒に至り、宣和殿・列岫軒・天真閣・凝德殿を通り過ぎたが、殿の東には高い岩でできた築山が高さ百丈ほどもあり、かつて見たときの倍ほどになっている。翠翹・燕閣の諸處を通り、全眞殿にて徽宗が手ずから淹れた茶を頂く。瑤林殿に出てしばらく休憩したのち、玉眞軒に到った。軒は保和殿の西南廡にあり、これが安妃の粧閣である。その後玉華閣で安妃に拜謁したのち酒宴となり、夜漏二鼓に散會した。⁽²¹⁾

以上長々と中味を見てきたが、ここに登場する「保和殿」とは、史料中の蔡京の言葉にあるように、本稿でいう保和新殿(B)の方である。こちらでも宣和殿(C)のときと同じく、保和新殿(B)が派手ではないということが強調されている。やはりポイントを抽出すれば

(一)臨華殿門(玉華殿に臨む門の意か)から入り、玉華殿で謁見。徽宗自身の案内で太寧閣を通り、層巒亭・凌霄亭・鸞鳳亭・垂雲亭に登る。

(二)保和殿本殿は三楹で、一楹に七十架、二つの挾閣あり。宣和元年八月に落成。

(三)左挾閣は妙有閣で經・史・子・集の書が、右は宣道閣で道家の書が収められる。

(四)稽古・邃古・尚古・鑑古・作古・傳古・博古・祕古の諸閣あり。

(五)玉林軒・宣和殿・列岫軒・天真閣・凝德殿あり。

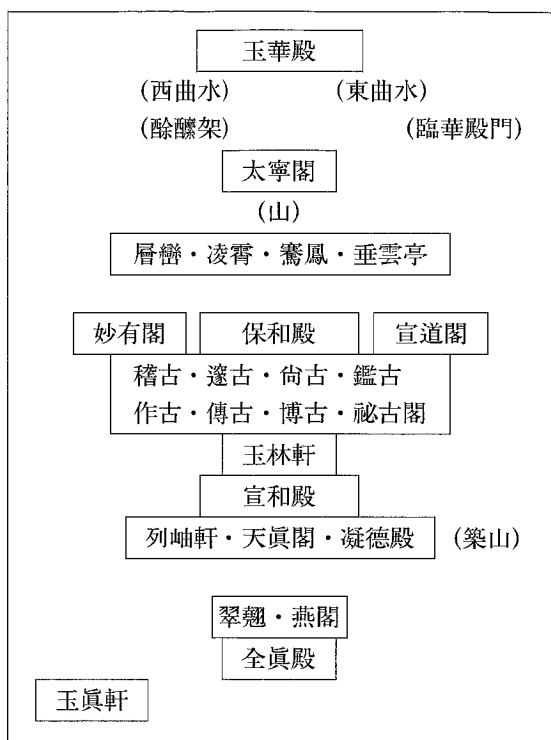
(六)凝德殿の東に高さ百丈(約三〇〇メートル)の築山あり。

(七)翠翹・燕閣を通り、全眞殿あり。そこから瑤林殿に出られる。

(八)玉眞軒が保和殿の西南廡にあり、劉安妃の粧閣。

となる(圖4)。一讀して氣づくように、保和新殿(B)と「宣和殿」がやはり別の建物として登場する。また特徴的な稽古・邃古などの諸閣があり、蔡條が『鐵園山叢談』で記していた「保和殿」はこの保和新殿(B)であることが分かる。²²

そして史料I「太清樓特宴記」と共通する名稱の建物がいくつか見られる。それは玉華殿・太寧閣であり、層巒・凌霄(史料IIでは琳霄)・鸞鳳・垂雲という四つの亭榭である。これら殿・閣・亭の登場する順序が史料Iの時點では太寧閣・四亭のあとに玉華殿が現れたが、IIではまず玉華殿で謁見し、そこから徽宗の案内で太寧閣・四亭に至っており、それぞれの巡回ルートは反対であることが知れる。Iからはこれらの建物が宣和殿の北にあることは明白なので、Iの



【圖4】「保和殿曲燕記」(史料Ⅱ)に見える保和新殿(B)の配置

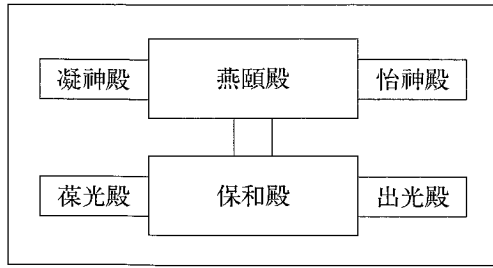
ときには南から逡巡ったものが、Ⅱでは北側から南下するルートを通ったと想定できる。玉華殿が『宋史』地理志に「玉華殿(在後苑)」というように宣和殿の北ないし西の後苑にあるとされていることもこれを裏づける。

さてⅡに描かれる保和新殿(B)は「三楹、楹七十架、兩挾閣」といい、この構造はⅠに見える宣和殿(C)と全く同じ造りである。²³⁾すなわち建物の構造も同種である上、周辺の建物の名稱も共通している。

さらには瓊蘭殿と凝德殿で名稱は違っているものの、東にはどちらも築山があり、Ⅱで蔡京は「かつて見た」と言っている。²⁴⁾それはⅠの政和二年三月に見た宣和殿(C)の東廊近くにあった築山(ポイントの(二))のことを指すものであろう。

以上から宣和殿(C)と保和新殿(B)は、同じ敷地内に存在し形式も同じではあったが、別々の殿だったことが判明する。その形式が一致していることは、両者が同じ敷地内にあって統一感を保つように配慮されていたとも考えられるし、地理的な限定要因があったためやむを得なかったとも考えられる。つまり宣和殿(C)の後方(北側)の地に造られたのが保和新殿(B)であった。

これに對し政和三年(一一一三)九月における保和殿(A)は、『皇朝編年綱目備要』にその特徴が示され、²⁵⁾



【圖5】『皇朝編年綱目備要』に見える保和殿（A）の配置

（一）本殿は「五楹挾三」（挾三は挾屋各三間の意か）東に出光殿、西に葆光殿。

（二）後ろに燕頤殿があり、兩側に怡神殿・凝神殿。楹數は保和殿と同じ。

（三）總計した殿屋の廣さは七十五間。

（四）後方の庭には太湖石が竝べられ、溪流が引かれ池が鑿たれている。

（五）左側には典誥・訓謨・經史が納められている。

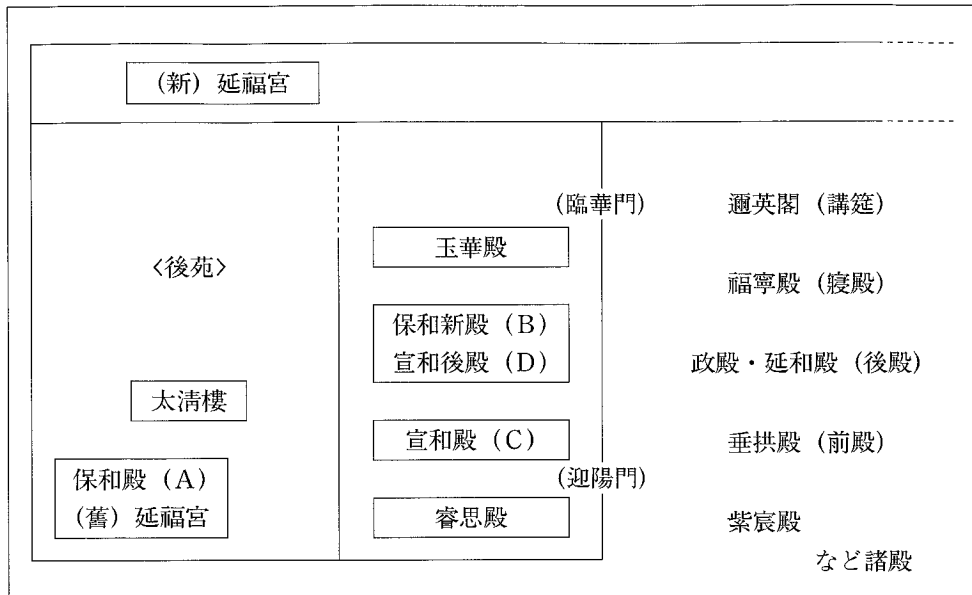
（六）延福宮を宮城の北に遷し、もと延福宮の跡地に保和殿が作られた。

というポイントが挙げられる（圖5）。この保和殿（A）は「五楹挾三」すなわち挾屋も含めて桁行十一間で、東西にも殿を持ち、平行する形で北側にも三殿を配する、いわゆる「工字型」の形式であり、上に見た宣和殿（C）・保和新殿

（B）とは違い、總計七十五間の廣壯な殿であった。さらに保和新殿（B）の大きな特徴であった稽古・邃古などの諸閣が存在していない。これらのことから、この保和殿（A）は保和新殿（B）とはその敷地も形式も異なる建物だと考えられる。

先に見たように、宣和殿（C）のあった場所はそれほど廣くなく（後苑にあった百數歩の空地）、したがって保和新殿（B）も同じ形式でしか造ることができなかった。それに對し保和殿（A）は一回り大きく、より廣い土地が必要であった。それがつまりポイントの（六）で言う延福宮の跡地であったのだろう。

新延福宮はこれもちの規模で造られ、人々の怨嗟の的となった建物で、童貫ら宦官の手によって造營された。政和三年（一一一三）春に着工し、翌年八月に完成している。²⁶先に見たように保和殿（A）も政和三年四月に造營が開始されており、この着工時期の一致



【圖 6】禁中西北部における宣和殿・保和殿の關係圖（概念圖）

は、兩者の建設計畫が連動したものであることを窺わせる。そして、保和殿(A)が建てられた舊延福宮の位置は、『宋史』地理志によると後苑の西南にあつて、その跡地は百司供應の所になっているという。⁽²⁷⁾ それがつまり保和殿(A)を指しているであろう。一方、宣和殿(C)・保和新殿(B)は禁中後苑の東部にあつたと思われるので、⁽²⁸⁾ 兩者の位置は後苑を挟んで東西に離れていて、敷地も共有しない全く別の建物だつたと思われる。

さて、はじめに示した四つの宣和殿関連建造物のうち、残る宣和後殿(D)であるが、これに言及する史料は管見の限り先に示した『玉海』・『宋會要』を除き存在しない。ただ想像を逞しくするならば、『玉海』等に見える宣和後殿(D)は重和元年(一一一八)に「靚め」られ、かたや保和新殿(B)は宣和元年(一一一九)八月に完成しており、宣和殿(C)を中心に見ればともにその北に存在していた。宣和後殿(D)として重和元年に工事を開始した建物が、翌年に保和新殿(B)として完成したものではなからうか。史料IIにおいて宣和殿(C)の後殿というべき位置にあるのは保和新殿(B)である。

以上を改めて整理すると、嚴密に言えば宣和殿(C)と保和殿

(A)・保和新殿(B)は違う建物であった。宣和年間になっても宣和殿(C)は一貫して存在しており、年號と重複したからといって改名されたわけではなかった。うち保和新殿(B)は宣和殿(C)の後殿(D)として造營され、同一敷地内に存在していた。これが四つの殿の関係になるだろう(圖6)。

思うにこのような殿名を呼稱する際、中心となる殿の名稱をもって一群の建物の場所を示すことがあり、そうした場合、中心となる殿は總稱としての名と、個別具體的な建物としての名の二つを有している。つまりこの際には、廣義の意味での「宣和殿」の中に、狹義の「宣和殿(C)」と「保和殿」(本稿でいう保和新殿(B))が存在しても不都合はないのである。

このように考えれば、宣和殿改稱の問題についてもほぼ解決が可能である。すなわち一區劃を示していた總稱としての「宣和殿」の呼稱を「保和殿」に切り替えたのであって、個別の殿名そのものを變更したのではないのである。そもそも宣和改元は、重和という年號が遼朝でも使用されており、これを徽宗が快く思わなかったことから、「上自ら常に處る所の殿を以て其の年に名づ」けたのだという。⁽²⁹⁾それを次は年號と重なるという理由で逆に殿名を變更するのは本末轉倒ではないだろうか。

またもう一つの可能性として、殿名變更は次章で見えるような、いくつかの宣和殿を冠する職名についてなされたものであったとも考えられる。名稱變更を命じた御筆では

宣和祕殿の名稱 已に元號を標紀す、所有る見行の宣和殿を帶領せる職事、易うるに保和殿を以て名と爲し、應ゆる班綴敍位・雜壓恩數等は、並びに舊に仍れ。⁽³⁰⁾

という。すなわち變更はあくまでも學士職など職事に冠せられる殿名を宣和殿から保和殿に變えたものの、例えば「宣和殿學士」を「保和殿學士」に變えるなどといったものであり、殿名そのものが變更したというのは、それを誤って伝え

ている可能性がある。

ともかく今改めて四殿の沿革を示せば、

大觀二年（一一〇八）四月 宣和殿（C）を改修。

政和二年（一一二二） 延福宮を北に移動。

同年三月 蔡京らと宣和殿（C）で曲宴。

政和三年（一一二三）四月戊子 舊延福宮の跡地で保和殿（A）の造營に着工。

同年九月丙午 保和殿（A）完成。

重和元年（一一一八） 宣和殿（C）の後方で後殿（D）造營に着工。

宣和元年（一一一九）八月 後殿（D）完成し、保和（新）殿（B）と呼稱。

同年九月甲辰朔 蔡京らと保和新殿（B）で曲宴。

宣和二年（一一二〇）二月 宣和殿（C）と保和新殿（B）の總稱を「宣和殿」から「保和殿」に改稱。³¹⁾
 ということになる。

第二節 宣和殿の機能

前章で見たように、狹義で言えば宣和殿（C）・保和殿（A）・保和新殿（B）は別の建物であるが、後苑西にあった（舊）保和殿（A）は別として、本稿で注目する宣和殿（C）・保和新殿（B）は廣義の意味では一體となっているものであった。よって以下、本稿においては、總稱として宣和殿の呼稱を使用していく。

徽宗は晝間は寢殿ではなく、睿思殿で講禮・進膳し、宣和殿で燕息していたという⁽³²⁾。つまり日中の大半は宣和殿で過ごしていたと思われる。そこにはどのような機能が備わっていたのであろうか。以下大きく文化的機能・政治的機能に分けて見ていきたい。

(一) 文化的機能

宣和殿の果たした役割で、最もその名を高からしめているのは書畫骨董の陳列館としての役割であろう。これについては既に示した史料にも見えるところで、もはや取り立てて説明する必要もないが、宣和殿(C)後方の保和殿(B)に附屬する稽古・遼古・尙古・鑑古・作古・傳古・博古・祕古の諸閣がその收藏庫であった。また有名な『宣和博古圖』『宣和書譜』『宣和畫譜』などは宣和殿の展示品カタログとして作成されたものであり、宮中コレクションの主なもの⁽³³⁾が網羅されていた。これらは北宋滅亡の際には女眞・金に根こそぎ運ばれていったという⁽³⁴⁾。その中には宣和殿の壁に嵌め込まれていた定武蘭亭の刻石もあった⁽³⁵⁾。

また、本殿や諸閣以外にも「宣和殿小庫」と呼ばれる財寶倉庫が造られ、珠寶などが納められていたことも確認できる。皇帝個人の財寶を納めた内藏の一種であろうが、宣和末年いよいよ金が迫り、和平交渉の使節を派遣するとき、使者にもたせた財寶はここから出されている⁽³⁷⁾。

次に確認できるのは宮中圖書館としての機能である。もともと宋朝において宮中の藏書は崇文館と總稱する三館・祕閣に收藏されていたが⁽³⁸⁾、のちには後苑にある太清樓にも一セット備えられ、眞宗・仁宗朝に宗室らと曲宴を行った際には圖書閱覽會も同時に開催されていた。太宗の遺品を納める龍圖閣などにも一部の書が置かれていたというが、主には三館・祕閣と太清樓の二カ所が宮中における藏書樓であった。

徽宗朝に入るとすぐに祕閣の藏書の繕寫作業が開始され、宮中圖書の整理が行われた⁽³⁹⁾。そこで缺卷のあるものについては全国各地より収集作業が進められたが、その方法は各地から進呈されるのを待つばかりでなく、官の方から搜集させるという積極さであった⁽⁴⁰⁾。政和年間には、大幅に増加した宮中藏書の目録を、仁宗・慶曆年間の『崇文總目』を増補する形で作成、『祕書總目』と名附けられた⁽⁴¹⁾。

『祕書總目』が完成したのちも藏書整理・修補は續いており、宣和四年（一一二二）には補完校正文籍局（『文獻通考』では補全校正文籍局）を設置するとともに、天下の藏書家に對し圖書の進呈を促し、宮中未收の書であれば賞するに官をもつてすることとした。その結果宮中圖書の規模は北宋史上最も完備したものとなった。まさに文人皇帝徽宗の面目躍如といえる。その上で書物を二セット複製し、三館祕閣・太清樓のほか、宣和殿にも備えられた。

廼ち命じて局を建て、文籍を補全・校正するを以て名と爲し、官を設けて總理し、工を募りて繕寫せしめ、一つは宣和殿に置き、一つは太清樓に置き、一つは祕閣に置き、提舉祕書省の官をして兼領せしむ⁽⁴²⁾。

具體的には前節で見たように、保和新殿（B）の左挾閣である妙有閣に經・史・子・集の四部書が、右挾閣の宣道閣には道家關係書が收められ、これらはこのときの圖書充實政策の賜物であった⁽⁴³⁾。

以上は具體的な「モノ」を備える働きであったが、そのほかに一種の宗教施設としての要素も持っていた。これも一種の文化的機能といえよう。もちろんその宗教とは徽宗朝に最も厚く遇された道教に關わるもので、すでに見たように圖書の收藏においても、道教關係書はその他四部の書と對比させられていた。一時隆盛を誇った神霄派遣教に絡んで、政和七年（一一二七）四月に「神霄」が宣和殿に降臨し、それを蔡攸・王黼らが命ぜられて徽宗とともに觀賞している⁽⁴⁴⁾。具體的に皆で何を見たのかは不明だが、徽宗にとって重要な「神霄」は宣和殿に降臨したのである⁽⁴⁵⁾。

さらに宣和殿の一角にある玉眞軒には劉安妃が居り、蔡京らは宣和元年の曲宴のときに對面している⁽⁴⁶⁾。劉安妃は政和

年間に

朝夕上に侍るを得、擅愛顓席し、嬪御之が爲に進むこと稀なり。⁽⁴⁷⁾

と言われたほどの寵姫で、宣和三年（一一二二）に三四歳で亡くなったのち、明節皇后と追贈された人物である。その寵愛ぶりは、神霄派遣教の領袖・林靈素が「九華玉真安妃」と目したほどであり、⁽⁴⁸⁾彼女がこの宣和殿の一角に部屋が與えられていたということからも、徽宗のプライベートルームとしての宣和殿の存在が窺える。また「玉真軒」という名も「九華玉真安妃」という名稱から來ていることは間違いない、室内に肖像畫が掲げられていたのも宗教的な意味合いが感じ取れる。

このように宣和殿には書畫骨董といった藝術品のみならず、宋朝最大規模となった宮中圖書コレクションも納められて宮中における文化的中心地となっていたが、徽宗の志向に伴ってやがて宗教的色彩も帯びてくる。さらには寵姫の過ごすスペースもあり、徽宗にとってかなり重要な場所であったことが窺える。

（二）政治的機能―御筆作成と睿思殿文字外庫使臣

宣和殿は皇帝である徽宗が「常に處る所の殿」であったことから、次第に政治的色彩を帯びるようになることは想像に難くない。『鐵圍山叢談』卷一には

太上（徽宗）即位せるより以來、尤深考愼、九重の至密と雖も、亦た預知するを得ず、獨り自ら學士に語るに姓名を以て之を命ずるなり。晩歲に及び、萬幾に倦むと雖も、然れども毎に相を命ずるに猶お自ら日を擇び、宣和殿に在りて其の姓名を小幅紙に親札し、緘封して玉柱斧子の上に垂らし、小璫をして之を持ちて前に導駕せしめ、内中より出でて小殿子に至り、學士に見えて始めて封を啓く。姓名を以て玉柱斧子に垂らすこと、政に唐人の金甌もて

之を覆うと何ぞ異ならんや。⁽⁴⁹⁾

とあり、宰相人事は徽宗が自ら宣和殿で決定していたという。

そうした政治的な意味で注目に値するのは、宣和殿が御筆手詔の發信據點となっていたことである。御筆手詔の問題についてはすでに專論があるが、⁽⁵⁰⁾宣和年間には宦官による御筆作成が行われていたという。

崇寧に親筆有り、乃ち御筆と稱す。……今、睿思殿文字外庫使臣楊球等の若き之を掌り、張補等點檢す、小閣三四人、出納を主り、寶を用いて以て外に付し、之を宣和殿の後廊に處く。但そ之を東廊と謂うは、即ち其の所なり。

寔に梁師成之を統ぶ。⁽⁵¹⁾

宣和年間において蔡京が制御できなくなったといわれる御筆手詔の宦官による勝手な作成は、宣和殿の後廊、通稱東廊において行われ、「東廊御筆」と呼ばれていた。それは「睿思殿文字外庫使臣」の楊球らが書し、張補らが點檢し、それを統轄していたのが梁師成だったという。梁師成は當時その文章が禁書處分となっていた蘇軾に私淑し、文に明るい者を配下に置いて御筆を支配し、「隱相」と呼ばれていたといわれるが、⁽⁵²⁾それはこの御筆統轄の状態を指すものであろう。

『宋史』梁師成傳によれば、彼が初めて握ったポストこそ「睿思殿文字外庫」であり、これは内廷から外部に上旨を傳達する職事であったという。楊球らの肩書きが「睿思殿文字外庫使臣」というのは、兩者の統屬關係を表すものであろう。睿思殿が宣和殿の前にあり、もと神宗の燕殿であったことはすでに前節冒頭で述べたところであるが、⁽⁵³⁾残念ながら文字外庫なるものがいつ置かれ、どのような職掌を果たしていたか明示する史料は見當たらぬ。

慕容彥逢『摛文堂集』卷八には「睿思殿御前文字外庫書寫文字郭景倩可三班借職制」との外制が残され、『水東日記』が載せる「太清樓特宴記」に見える政和二年當時の人物の肩書きとして「睿思殿御前文字外庫鐫字藝學」「睿思殿御前文字外庫祇應」が見えている。⁽⁵⁴⁾また、天子・皇帝の八寶に續く、「九寶」として政和七年（一一一七）に造られた定命寶

の作製も、睿思殿御前文字外庫が中心となつて行つていたといわれ、⁽⁵⁵⁾當時御筆をはじめとした皇帝に関わる文書作成に睿思殿御前文字外庫が關與していた可能性は高い。⁽⁵⁶⁾

徽宗は睿思殿で講禮・進膳していたといひ、諸史料から睿思殿と宣和殿が隣接していたことは確かである。⁽⁵⁷⁾そして『事林廣記』『京闕之圖』には、總稱としての宣和殿は現れるが、睿思殿は登場しない。これらのことから、おそらくこの兩者も宣和殿(C)・保和新殿(B)と同じ關係にあるもの、つまり同一地に存在し、廣義の「宣和殿」に睿思殿が含まれるものだったのだろう。⁽⁵⁸⁾そのため肩書きに睿思殿を附けたまま宣和殿で活動することも可能だったと考えられる。その名稱を宣和殿に變更しなかったのは、神宗朝の「紹述」を旨とする徽宗朝において、神宗のイメージが残る睿思殿の政治的影響力を利用したかったからかもしれない。

實際に御筆作成に携わっていた楊球・張補らも文字外庫附きの使臣というのみであるが、文書作成に關わっていたことから「睿思殿御前文字外庫書寫文字」などの肩書を所持していたのであろう。梁師成の配下ということであるから、いづれ宦官に近い下級武臣かと想像される。

彼ら二名のうち張補については残念ながら他の史料で追跡することは不可能であるが、楊球については少し判明することがある。

まず意外な史料ではあるが、『三國史記』卷四八・金生傳に楊球が登場する。

崇寧中、學士洪灌進奉使に隨い宋に入り、京に館す。時に翰林待詔楊球・李革、帝敕を奉じて館に至り、圖箴を書す。洪灌、金生の行草一卷を以て之に示す。二人大いに駭きて曰く「圖らざりき、今日王右軍の手書を見るを得んとは。」洪灌曰く「是に非ず。此れ乃ち新羅の人金生の書せし所なり。」二人笑いて曰く「天下右軍を除きて、焉くんぞ妙筆なること此くの如き有らんや。」洪灌屢しば之を言うも、終に信ぜず。⁽⁵⁹⁾

とある。金生は統一新羅の名書家「神品四賢」の一人で、彼の書の巧みさが王羲之レベルであったことを示したエピソードである。話の主役である洪灌は、高麗睿宗・仁宗朝の人（？～一二二六）で尙書左僕射に陞ったが、李資謙の亂で落命しており、確かに北宋末の人物である。⁽⁶⁰⁾ 彼が學士の身分で中國に遣使された記録は見当たらないが、高麗が崇寧年間に遣使したのは高麗肅宗九年＝崇寧三年（一一〇四）七月の一度だけで、このとき楊球は「翰林待詔」であった。

この「翰林待詔」は當時翰林院（學士院とは別）にとどめ置かれた人物群に廣範に與えられた稱號であり、どこまで嚴密な「官」あるいは「差遣」と考えられるかは難しい。太宗朝においては「翰林棋待詔」や「翰林琴待詔」などが存在し、それぞれ將棋・琴をもって皇帝に仕えた人物であった。⁽⁶²⁾ 要するに「翰林待詔」とは、皇帝に何らかの一藝をもって奉仕する者に、一律に付與された稱號であり、必ずしも「翰林待詔」というポストが常に御筆など文章作成に携わっていたとはいえない。しかし逆に言えば、「翰林待詔」という非常に曖昧な名稱で君側に留め置かれた者たちの一部が、皇帝の代筆を務めることは十分考えられた。葉夢得は「近歲」のこととして、宰相が詔の要點を自ら作文し、進呈し終えたあと、「待詔」を召して私邸で書寫させていたと言い、「待詔」が詔令の作成に従事することが現にあった。⁽⁶³⁾ 楊球もそのような翰林待詔の一人だったのであろう。

この楊球は南宋に入ると成忠郎・敕令所檢閲文字の肩書きで登場し、⁽⁶⁴⁾ 中書門下後省での召試を突破し、武階から文階に換えられんとしたが、沈與求の反對によつて阻止されている。そこで示される彼の出身は、もと蔡京家の吏・楊哲の子で、范宗尹の推薦を受けていたとされる。⁽⁶⁵⁾ 召試において策一道に回答し、及第したのであるから、一定以上の文章作成能力を保持していたことは確かである。また成忠郎は政和寄祿階において正九品相當の武階小使臣であり、睿思殿文字外庫使臣あるいは翰林待詔から成忠郎に出職・出官することは十分あり得ることだった。

これら斷片的な事實でしか確認は出来ないが、宣和殿で命令文書、特に御筆の作成が行われていたことは間違いない

と思われる。

以上のように、宣和殿は美術品・書籍の收藏や、宗教的意義をも含んだ徽宗趣味の館というばかりでなく、行政文書の發信據點ともなっており、政治的にも重要な場であった。特に皇帝眞筆が建て前となっていた御筆の作成が、皇帝の常に居る場所で行われるのは當然のことと言える。徽宗朝の開封といえ、とかく延福宮や艮嶽など目立つ建造物のみに注目しがちであるが、皇帝徽宗の常殿であった宣和殿の文化的・政治的機能を見無視することはできないと思われる。⁽⁶⁶⁾

第二章 蔡京一族と宣和殿

第一節 宣和殿學士の設置——兼論直宣和殿

第一章において宣和殿の構造・諸機能について明らかにしたように、徽宗朝において宣和殿は單に文化的據點だっただけでなく、皇帝徽宗が大部分の時間を過ごす空間であり、結果として政治的色彩をも帯びる場所であった。そこで次にこの場所に關わる制度として見過ごせないのが宣和殿學士の存在である。

宣和殿に學士が設置されたのは政和五年（一一一五）で、最初の學士は蔡京の長子蔡攸であった。そのランクは當初、延康殿學士（もとの端明殿學士。政和四年に改稱）の下であったが、翌年には翰林學士の下、諸閣學士の上に改められている。⁽⁶⁷⁾ 次いで政和七年（一一一七）には大學士が資政殿大學士に準じる形で設置され、これまた蔡攸が任じられた。⁽⁶⁸⁾ その後、宣和殿には直學士・待制の職も置かれ、ともに茂德帝姫の駙馬都尉である蔡條のために設けられたものである。⁽⁶⁹⁾ 結果として宣和殿には、四種の館職が設けられたのだった。

これら宣和殿の館職については、梅原郁氏がすでに言及されている。⁽⁷⁰⁾ そこでは徽宗朝における貼職濫發を受け、蔡京

一黨が他の貼職所持者と比べて自らの優越性を強調するため特に創出したものとされ、すでに蔡京一族と宣和殿學士との密接な關係に言及しておられる。ただそれ以上踏み込んだ考察はなされておらず、あくまでも一館職として捉えられるに止まっている。たしかに館職制度を通觀するに當たり、その枠組みの中でこの宣和殿（保和殿）學士を見た場合、單に相對的な優位性を保つ一指標としか映らないのも無理はない。しかし詳細に考察すると、他の館職とは大きく異なる性格が次第に浮かび上がってくる。

まずその設置の御筆は以下のように言う。

宣和祕殿、紹聖中に建つるに經に毀ちて撤廢せられ、更めて崇寧初に至り繼いで復た繕完す。朕萬幾の餘暇、游息せる須臾の間、未だ始めより此に居らざることなし。近ごろ直殿を置き、左右近侍の官を以て典領せしむるも、吾が士大夫未だ以て之に處ること有らず。宜しく新班を置き、以て榮近を彰し、其の傳うるを永えにせん。宣和殿學士を置くべし、班は延康殿學士の下に在り、兩制を以て充て、旨もて除授するを聽す。凡そ厥の恩數、並びに延康殿學士の體例に依りて施行せよ。^①

すなわち近年、宣和殿に「直殿」を設置し、左右近侍の官、すなわち宦官に領せしめていたが、士大夫はそれに預かっていなかった。そこでいま新たに學士を設置する、というのである。まるで宦官職の「直殿」をモデルとして學士職を設置したかのようなのである。同じく宣和殿學士について伝える朱彧『萍洲可談』卷一も

宣和殿、燕殿なり、中貴人の官高き者は皆な直宣和殿たり。始めて學士を置きて蔡攸に命じ、直學士を置きて蔡脩・蔡條に命じ、待制を置きて蔡條に命ず。後又大學士を置きて蔡攸に命じ、盛章・王革・高佑より皆な相繼いで學士と爲る、班秩は延康殿學士に比して優を加えたるなり。凡そ外除なれば則ち延康に換う、蓋し宣和は職親しく地近きこと、他の比にあらず。己亥の歲、保和殿に改む。^②

といい、やはり宦官の「直宣和殿」に沿った説明を行っている。⁽⁷³⁾すなわち宦官ポストの系譜を引いて設置されたのが宣和殿學士であり、その設置の経緯は從來の館職と大きく異なっている。この宦官の直宣和殿との關連を無視して、これまでと同じ一館職としてしまうと、宣和殿學士の本質を見誤る可能性があるだろう。

では「直宣和殿」とは何なのか。『續資治通鑑長編』卷三二一・元豐五年正月條の李燾注は李德芻の『邠歎子』を引いて

内臣舊と管勾天章閣の類有り、政和中、三十人の事を用うる者を擇び、改めて直睿思殿・宣和殿と稱し、祇應に及べば大御佩魚す。⁽⁷⁴⁾

と述べ、政和中に定員三〇人の「直睿思殿」・「直宣和殿」という宦官ポストがあり、かつての「管勾天章閣」の類であるという。「管勾天章閣」の名は仁宗朝、呂誨の上奏文に見え、これは當時宦官の役職の中で天章閣・後苑・内東門・御藥院の四部署の管勾職が優遇されすぎており、それらの人數と年限を制限するよう求めたものである。⁽⁷⁵⁾これら四つの役職はどれも宦官職のうち最も皇帝に近いポストにあたり、それぞれ實職を伴ったものであった。⁽⁷⁶⁾特に天章閣は第三代眞宗の遺品が納められた場所であり、同時に仁宗の書齋でもあったから、プライベートでの小間使いといったところであろいか。やはり宦官の中でも最も側近に位置するポストだったと思われる。

これに類する形で設置されたというのが「直睿思殿」・「直宣和殿」であるが、睿思殿はすでに見たように神宗の燕殿で廣義の「宣和殿」に含まれ、御筆作成に携わる宦官・使臣に與えられた稱號にも使用されていた。ここでもまた睿思殿にまつわるポストが登場したわけだが、直睿思殿なるポストについては龔延明『宋代官制辭典』（中華書局、一九九七年）一五五頁に記述がある。そこには政和三年（一一三三）十二月十八日に貼職と定められたが、政和六年九月に廢止され、その位序は直祕閣の次に位し、宦官が帶職して「直殿」と簡稱された、とされる。その典據となった史料を確認す

れば、『宋會要』職官五六―四二・官制別錄で、

（政和三年）九月二十二日、保靜軍節度觀察留後・提舉龍德宮・直睿思殿楊戩奏すらく「朝廷直殿の職を肇新し、其の繫銜等の次序、安んぞ敢えて議有らんや、若し止だ帶職・非帶職、正任轉官の先後を以て次と爲さば、大いに恐るらくは未だ朝廷直殿の職任を肇新するの意に稱わず。伏して望むらくは詳酌立法して施行せられんことを」と。詔す、直睿思殿を帶びる人、繫銜序位等は、職を帶びざる人の上に在り、と。

十二月十八日、中書省言えらく「勘會するに、直睿思殿は既に繫銜序位職を帶びざる人の上に在り。合に貼職と爲し文を立つべし。其れ睿思殿供奉も亦た當に一體に立法すべし。……今參酌して『集賢殿修撰至直祕閣・直睿思殿并睿思殿供奉爲貼職』等の條を修立したり。」⁽⁷⁷⁾

ここからは、政和三年に新たに宦官に對する貼職が設けられていたという興味深い事實が知れる。いま言う貼職とは、元豐官制改革で一度姿を消した、職事をとまなう三館祕閣の館職が、元祐期に實職とは切り離されて名譽稱號として復活した下級館職のことであり、單に「帶職」などと同義に使用される廣義の「貼職」とは違ふ。⁽⁷⁸⁾この狹義の貼職カテゴリーが『宋會要』職官五六―四四・政和六年九月十七日條に見えるかたちで最終的に整備されたのである。その中に政和三年には見えていた直睿思殿・睿思殿供奉（官）が並んでおらず、これをもつて龔氏は、兩者ははじめ貼職として企圖されたものの、最終的に貼職となりえなかつたと解釋されたのだらう。⁽⁷⁹⁾しかし諸史料からは政和六年以後も實際に直睿思殿を帶びる宦官が散見され、このことから上記の『宋會要』政和六年の規定はあくまで士人向けに用意された貼職カテゴリーに關するものであり、宦官向けのそれは含まれていないと考えることが出来る。

以上により、館職濫發がしばしば指彈されてきた徽宗朝には、宦官に付與される貼職までもが存在していたことが判明するのである。

その貼職である直睿思殿と並んで登場したのが「直宣和殿」であり、両者が基本的に同じ性質のものであったことは、容易に想像されるところである。史料上では、政和年間には「直宣和殿」が、宣和年間には「直保和殿」が確認できる。⁽⁸¹⁾そこに見えている就任者は梁師成や童貫であつて、まさしく當時の宦官のうち徽宗の最も身近に近侍する者たちであつた。

すなわち、宣和殿にはもともと宦官が任命される「直宣和殿」という館職が存在しており、宣和殿學士の士人館職もその延長上に設置されたものであつた。その成り立ちからして、宣和殿學士はこれまでの館職とは一線を劃したものであり、その特異性が窺えるのである。

さて、その宣和殿學士の職掌についてははっきりと示されていないが、やはり特定の職事は有していなかったと思われる、その意味では他の館職と同じであつた。しかし他の館職と決定的に違うのは、これまでの館職はその優遇性を表す指標に過ぎず、たとえ觀文殿や資政殿の名を冠していても、實際にその殿閣に出仕するわけではなかったのに對し、宣和殿學士はその名に冠する宣和殿に出入することができたようなのである。宣和殿待制となつたことのある蔡條は『鐵圍山叢談』卷一で、政和中、宣和殿に「侍祠」していたとき、夜間における禁中の事情（この場合は時制）を「つぶさに聞い」ていたといふ。⁽⁸²⁾蔡攸も

徽宗まさに（蔡）京を斥去せんとし、中書舍人王安中を用て御史中丞と爲し、京を劾せしむ。攸時に宣和殿に直たり、禁庭に通籍し、其の事を聞く、亟かに宮に入り請聞し、父の爲に扣頭懇請す。徽宗乃ち已め、安中を徙して翰林學士と爲す。京復た職を安んず。⁽⁸³⁾

あるいは

上 此れより毎に之（陳瑩中＝瑾）を用いんと欲し、朝廷上下皆な其の復用を恐る。又た曾て宮禁に於いて左右に對

し璫の宜しく召すべきの意に説い及ぶ。時に蔡攸亦た側に在り、對えて曰く「璫罪を宗廟に得、陛下之を用いんと欲すと雖も、其れ在天の靈を如何せん。」上蹙頞する者これ久し。⁽⁸⁴⁾

というように、皇帝の側にあつて禁庭に通籍し、その意志をいち早く察知して、外部の人間が知る以前に對處し、父・蔡京を蔭から助けている。これは頻繁に禁中に入りにきていなければ不可能な所作である。

また徐度『卻掃編』卷中は

國朝、宰相・執政既に政事を罷むれば、藩府に居ると雖も、恩典皆な殺ぐ。政和中、始めて宣和殿大學士を置き、蔡攸を以て之と爲し、俸賜・禮秩悉く見任二府に視ぶ。其の後之に踵ぐ者、其の弟脩(脩)・其の子行、孟昌齡・王革・高伸も亦た繼いで之と爲る。然れども皆な宮觀使或いは開封府・殿中省の職事を領し、未だ嘗て外に居らず。革の大名に出鎮するに及び、舊職に仍りて以て行き、而して恩典は悉く京師に在るが如し。其の後蔡靖・資政殿學士を以て知燕山府たり、これ久しくして、亦た是の職に進みて再任す、恩數之に加わり、前宰相と雖も亦た及ぶ莫し。⁽⁸⁵⁾

といい、その俸賜・禮秩の優遇性を強調するとともに、宣和年開後半の王革・蔡靖の例を除き外任には與えないという原則を述べる。⁽⁸⁶⁾これは基本的に宣和殿學士が宣和殿に侍るものという意識からきたものであろう。

そうであるならば、宦官の貼職に倣つて宣和殿學士職が設置されたことも頷ける。宣和殿學士ははじめから宦官と同じく、禁中の宣和殿にあつて徽宗に侍ることを目的に創られた、異質の館職であつたのだろう。程俱『北山小集』卷二

○「代宣和殿學士表」に言う「(宣和殿)學士は内朝の班に列す」とは、他ならぬ禁中に侍つていたことを明示している。⁽⁸⁷⁾

ところで、これら宣和殿學士・大學士に關しては、いずれも蔡攸が先陣を切つて與えられており、學士職と蔡攸の密接な關係が窺えるのだが、これに關してさらに注目すべきは、大學士であつた蔡攸が、外任に轉じて學士職を失つたあ

と、再び開封に戻ったときに「直宣和殿」の稱號を帯びていたという事實である。「宋會要」に見える彼の肩書きは、宣和四年（一一三二）の段階で「少保・鎮海軍節度使・開府儀同三司・上清寶籙宮・直宣和殿」であり、翌五年も「少保・鎮海軍節度使・兼侍讀・直保和殿・河北河東路宣撫使」であった。⁽⁸⁹⁾これは同年六月の領樞密院事就任をもって落とされたようだが、⁽⁹⁰⁾本來宦官の貼職として用意された「直宣和殿」（あるいは直保和殿）を、一度はその大學士にまで陞った人物が帯びていたのであり、蔡攸と宣和殿に浅からぬ因縁が感じられる。⁽⁹¹⁾陸游『渭南全集』卷五に載る條對狀の三條目には

方に宣和の間、王黼太宰を以て應奉司に行し、蔡攸三孤を以て直保和殿たり、紊亂の事、遂に禍萌と爲る。⁽⁹²⁾とあり、三孤の一である少保あるいは少傅となっていたにもかかわらず、直保和殿となったことは、制度の紊亂である
と非難されている。

以上、北宋末のこととして残存史料は少ないものの、宣和殿學士とは宦官ポストたる直宣和殿に端を發し、禁中にある宣和殿という「場」と密接に結びついた館職であったと行うことができる。第一章で見たように、宣和殿と結びつくということは、とりもなおさず徽宗その人と結びつくことにつながる。そしてその端緒を開いたのが常に蔡攸という人物であったことに注目したい。

あえて極論が許されるならば、宣和殿の學士職とは、當初ほぼ蔡攸のためだけに設けられたものであり、蔡攸という人物を宣和殿に結びつけておくためのものだったと言えるのではなからうか。後述するように、長らく宣和殿學士・大學士であったのが蔡攸一人であったこと、そしてのちには直宣和殿という元來宦官のために設けられたポストを使つてまでも、宣和殿との關係を保持し續けていたことがそれを裏附けている。ある人物がある場所に結びつけるため、一つの制度が作られるということは往々にして存在することであり、それは宋代の館職という制度においても同様であった。

そもそも龍圖閣は太宗の遺品を納める場所であると同時に、眞宗の私的な書齋ともなっており、當時、宋朝で初めての待制に任じられた杜鎬は、彼のために特別に設けられた直學士・學士の稱號を次々と與えられ、眞宗の實質的顧問（ただし杜鎬の場合はあくまで文化面における）として龍圖閣という場と密接な關係を持っていた。⁽⁹³⁾これが諸殿學士の濫觴である。本節で見た蔡攸と宣和殿の關係も、これに共通するものではなからうか。

さて、當初蔡攸のためだけに設置された觀のある宣和殿館職は彼に引き續いて幾人かの者たちの就任が確認できる。いま大學士を筆頭に、學士・直學士・待制の就任者を可能な限り舉げてみたものが末尾に附した【表】である。以下若干の補足説明を加えてみる。

まず判明するのは既述の『萍洲可談』に載る人物らで、直學士に②蔡脩・③蔡儵が、待制に④蔡條が、學士に⑤盛章・⑥王革・⑦高佑が命じられたというものだ。

②蔡脩は蔡京の次男で、宣和元年八月には宣和殿直學士であることが他の史料からも確認できる。⁽⁹⁴⁾

③蔡儵・④蔡條はそれぞれ蔡京の四男と五男で、『萍洲可談』以外の史料では直學士・待制への就任は確認できなかった。以上①蔡攸から④までの四人はいずれも蔡京の息子らであり、この宣和殿館職が他の館職とは違う性質のものであることは濃厚に窺える。

⑤盛章は地方官を歴任した後、政和年間後半には長く開封府長官を勤め、賜第を賜った人物であるが、その宣和殿學士就任は他史料では確認できない。⁽⁹⁵⁾

⑥王革は既述の『卻掃編』も宣和殿學士就任に言及しており、同書卷下には「王保和革爲開封尹」と表現され、大學士ともなっていた。⁽⁹⁶⁾ただ『卻掃編』以外の史料からは窺えなかった。

⑦高佑は小説『水滸傳』の惡名高いかの高俅の兄弟であるが、その宣和殿學士就任は確認できなかった。

續いて、宣和殿職への就任者に言及するもう一つの史料『卻掃編』には、⑧蔡行・⑨孟昌齡・⑩高伸・⑪蔡靖が挙げられている。

⑧蔡行は①蔡攸の子であり、長らく殿中省を牛耳った人物であるが、『卻掃編』からは宣和殿大學士をもつて領殿中省事となっていたことが判明する⁽⁹⁸⁾。

⑨孟昌齡は宋代史研究の基本工具書である『宋人傳記資料索引』『同補編』などに採録されていない人物だが、徽宗朝に一貫して水利關係の差遣に就いており、「孟昌齡父子河防之役」を臣僚から非難され⁽⁹⁹⁾、南宋に入っても、蔡京・童貫ら「六賊」とともに本人・子孫の出仕停止處分を食らっている。彼の保和殿學士就任は、『宋會要』で確認できる⁽¹⁰⁰⁾。

⑩高伸は⑦高佑とともに高俅の兄弟であり、殿中監となった人物であるが、宣和殿學士就任は確認できない。

⑪蔡靖は北宋末に金朝との交渉の末、燕京が讓渡された際、同知燕山府（燕京を改稱）となり、同時に保和殿大學士となっている。

以上が『萍洲可談』と『卻掃編』に見える人物について挙げたものだが、更に宣和殿（保和殿）の職に就いたことが窺える人物が数人挙げられる。

まずすでに述べたが、蔡京の息子で、徽宗の娘・茂德帝姬を娶った⑫蔡條が待制、次いで直學士に任じられている。

次に⑬王黼である。彼は蔡京に代わって宰相となり、やはり悪臣として名高い人物だが、政和六年（一一一六）に宣和殿學士となっていた⁽¹⁰¹⁾。ただし【表】にあるように、これは父の喪中に起復している間のみ與えられており、特別な措置であった可能性が高い。

また⑭薛嗣昌・⑮劉曷の宣和殿學士就任が『宋史』で⁽¹⁰²⁾、⑯宇文居中の保和殿大學士就任が『會編』でそれぞれ確認できる⁽¹⁰³⁾。

以上のように、宣和殿學士職の就任者については、今のところ合計十六人が見えるのみで、その全貌は掴みにくい。これは北宋滅亡前夜という時代的制約以外にも、零細な史料から窺える就任者が蔡京・高俅の一族であったり、^⑬王黼・^⑭孟昌齡といった「六賊」に連なる者達であることから、それを忌避する感情が史料上に働いた結果でもあろう。ともかく皇帝徽宗の身邊において活動し、後世「姦臣」と言われた人物らが、多く宣和殿の學士職を所持していたことが確認できる。

これら宣和殿職の端緒を開いたのがつねに①蔡攸であったことはすでに述べた所である。【表】を見て分かるように、特例である王黼と、やはり茂德帝姬を娶ったことによる恩典であった蔡攸の待制就任を除くと、政和年間に宣和殿學士・大學士に就いていたのは蔡攸一人であった。ここからも当初、宣和殿學士の設置は蔡攸への付與を目的としたものであったことが窺える。宣和殿學士の登場は、蔡攸と宣和殿・徽宗とのつながりの上ではじめて可能だったと思われる。以降の學士職の廣がりには、あくまでもその結果に過ぎないのではないだろうか。そうであるならば、まず蔡攸と徽宗との關係を確認せねばなるまい。節を改めて検討しよう。

第二節 徽宗と蔡攸

この北宋末という時代について見るとき、「專權宰相蔡京」の存在は大きく、蔡攸はこれまで「蔡京の息子」ということでしか語られてこなかった。しかし史書に目を通したとき、實は蔡攸は蔡京よりも以前に徽宗の知遇を得ていたことが知れる。『宋史』卷四七二・姦臣傳・蔡京傳附攸傳には

元符中、在京裁造院に監たり。徽宗時に端王爲り、退朝する毎に、攸適たま局に趨き、諸に塗に遇い、必ず下馬拱立す、王左右に問い、蔡承旨（蔡京）の子爲るを知り、心に之を善しとす。即位に及び、其の人を記し、遂に寵

有り。⁽¹⁶⁾

とすでに徽宗が端王であったときに接觸を持っており、攸の恭謙さが徽宗に好意的に映ったという。もちろん徽宗は、章惇・蔡卞らとともに新法を強力に推し進めていた翰林學士承旨・蔡京のことは知っていたであろうが、それほど昵懇であつたわけでもなく、即位後、翰林學士承旨を罷めさせられて杭州に逼塞していた蔡京が、書畫骨董を求めてきた童貫と意氣投合したことで、はじめて両者は接近したと言われている。⁽¹⁷⁾しかし蔡攸と徽宗の心理的接近はすでに徽宗の端王時代に始まっており、蔡京とのそれより遙かに早かつたことになる。

さらに徽宗と蔡攸の親しさはその呼び方からも窺える。徽宗は蔡攸の名を呼び捨てにせず、もっぱら「蔡六」と呼び、それは家人の禮をもつて遇したものだといふ。⁽¹⁸⁾またのちのことになるが宣和四年（一一二二）蔡攸が宣撫副使として燕京に向け出立する際に

蔡攸 童貫の副として出師北伐す。……既に行くに、徽宗 其の父京に語りて曰く「攸辭するの日奏するに、功成りし後要ず朕を問いて念四・五都を覓めんと、其の英氣此くの如きを知る。」京但だ謝するに小子の狀無きを以てす。

二人は乃ち上の寵嬪、念四なる者は閭閻好なり。⁽¹⁹⁾

といささか下卑た戲言を弄している。恐縮する蔡京に對して、それを笑い飛ばす徽宗という構圖は、蔡京と蔡攸のいずれが徽宗に近い位置にあつたかを物語る。宮崎市定氏は蔡京父子のとするスタンスの違いを指摘した上で、蔡攸や王黼らの政治を「ゲイ・ボーイ政治」と一刀兩斷されたが、まさにそれが現出したエピソードだといえよう。謂わば徽宗から見れば、蔡京の方こそが當初は「あの蔡攸の父」という認識であつた可能性が高い。

それではかほど徽宗に寵愛を受けた蔡攸とは、一體どのような人物であつたのか。蔡攸、字は居安、蔡京の長子。王稱『東都事略』卷一〇一・蔡京傳附攸傳によると、靖康元年（一一二六）に「年五十」で死んでいるから、西曆一〇七

七年、熙寧一〇年の生まれであった。おそらくは父の恩蔭をもって元符中に監在京裁造院となり、當時端王であった徽宗の知遇を得たのは、大體二三、四歳のときであろう。崇寧三年（一一〇四）に特に進士出身を賜り、政和年間に入ると、『九域圖志』編纂や明堂建設など朝廷による各種制度の策定に携わっている。だが『宋史』によれば、三館の俊英が集まる編集スタッフの中で、ひとり「懵くして學を知らず」浮いた存在であったという⁽¹⁰⁾。

その一方で、蔡攸は幼くして明敏であり、叔父の蔡卞に連れられて王安石を訪ねた際、鋭い質問で王安石を困らせたという逸話もあり、あるいは曲宴の席で徽宗が蔡攸を「相公公相子」と呼ぶと、すぐさま徽宗を「人主主人翁」と返すなど、機知に富んでいたことを窺わせる。この機轉の早さが徽宗の寵愛を受けた大きな要因であろう。先の「懵不知學」であつたとの評価も、蔡京一族にかけられた後世からのバイアスを勘案せねばなるまい。

また蔡攸が常に徽宗に近侍していたことを示す史料としてよく知られているのが『宋史』蔡攸傳の記事である。

攸開府儀同三司・鎮海軍節度使・少保を歷、進見するに時無く、益ます事を用い、王黼と宮中の祕戲に預かるを得、或いは曲宴に侍せば、則ち短衫窄袴、塗抹青紅にして、倡優侏儒に雜じり、多く市井の淫嫖譁浪の語を道い、以て帝の心を疊わす。妻の宋氏禁掖に出入し、子の行殿中監を領す。（攸は）視執政、寵信其の父を傾く⁽¹¹⁾。

禁中での宴會に馬鹿騒ぎをし、俳優にまじつて道化役をつとめたという。このとき妻の宋氏も禁中に出入りできていたというが、通常、禁中には一般の官僚ですら出入できないはずであり、だからこそ專權宰相がその權力維持のために宦官と手を結ぶ必要が出てくるし、宣和殿學士の特殊性がある。よつて學士であつた蔡攸はともかく、その妻が禁中に入りできたというのはどういうことであろうか。これに關して『朱子語類』卷一四〇・論文下・詩に興味深い話が載っている。

蔡京父子京城の西に在りて兩坊に對し甲第四區を賜う、天下土木の工を極む。一に曰く太師第、乃ち京の自居なり。

二に曰く樞密第、乃ち攸の居なり。三に曰く駙馬第、乃ち僚の居なり。四に曰く殿監第、乃ち攸の子の居なり。攸の妻劉、乃ち明達・明節の族、寵有り、二劉の容るるあたわず、乃ち攸に出嫁し、權寵の盛之に亞ぐ。⁽¹⁵⁾

ここでは蔡攸の妻が劉氏であり、もと明達・明節の兩劉皇后の一族で、徽宗のお手がついたが兩皇后の手前宮中に残れず、蔡攸に下賜されたという。つまりその縁故を利用すれば、蔡攸の妻「劉氏」が禁中に出入りできたとしても領けるのである。しかし蔡攸の妻は先に見たように「宋氏」となっており、それは姻戚関係などから見ても動かし得ず、『朱子語類』の言う「劉氏」と矛盾を來すことになる。あるいは宋氏が亡くなったのちに劉氏を賜ったのであろうか。

ただ蔡京一族と「劉氏」とのつながり自體を示す史料は他にもある。

第一章第一節における史料Ⅱ「保和殿曲燕記」の後半では、蔡京は劉安妃すなわち明節皇后と對面している。妃のお出ましを詩で願った蔡京に對し、徽宗は「況んや姻家なれば、自ずから當に見ゆるべし。」と語りかけ、蔡京は「頃ごろ葭莖に緣り、已に拜望するを得」と述べる。⁽¹⁶⁾「葭莖」は『漢書』景三王傳の中山靖王勝傳にある「葭莖之親」すなわち遠い親類を指しており、この會話からはやはり明節皇后劉氏と蔡京が近い過去に親戚関係となっていた事實が窺えるのである。そしてそれは蔡京にとって「遠い親戚」であり、『鐵圍山叢談』卷三が

政和末に及び、伯氏（蔡攸）既に戚里と連姻し、後大いに第を開き、河路を開き、複道を作りて、以て宮禁に通ず。⁽¹⁷⁾ と言うように、これはむしろ蔡攸一家を中心とした後宮との姻戚關係形成があったことを指すと思われる。ここにおいて蔡攸は蔡京とは別に、徽宗とつながる独自のルートを持っていたと想定されるのである。

さて、話を再び蔡攸と徽宗との關係究明に戻すと、宣和年間後半に至り、史料上では兩者の密接な關係が様々な政治的場面で窺えるようになる。

すでに觸れたように宣和四年（一一二二）蔡攸は宣撫副使の身分をもって宣撫使童貫に遅れて燕京出征に向かうが、

その立場は童貫を助けるものではなく、その行動を監視することにあつた。他ならぬ徽宗自身が出征時の蔡攸に對して卿は朕の倚毘するところ、右に出ずる者無し。卿を輟めて副と爲す所以は、實に監軍なるのみ、軍旅の事の如きは、卿何ぞ焉に預からん。只だ専ら民事を任せ、及び貫の爲すところを監察せば可なり。

と聲を掛けてゐる。⁽¹³⁾この時期、徽宗の童貫に對する信頼度は次第に低下してきており、諸事において童貫とは別系統の宦官を配置し、獨自の情報収集に努めてゐる。⁽¹⁴⁾蔡攸の副使任命もそこから決められた可能性は高く、從來言われているように蔡攸と童貫が一貫して初めから協力關係にあつたというわけではない。⁽¹⁵⁾今回の作戦における蔡攸の役目は、宦官が派遣されることの多い監軍としてのものであり、その背景には徽宗との強い信頼關係が窺える。⁽¹⁶⁾

結果、遂に大敗して自力での燕京攻略を果たせず、女眞の助けを借りざるを得なかつたその責任は、ほぼ童貫一人が背負うことになり、宣和五年（一一二三）七月に燕山府（燕京を改稱）から凱旋してすぐ、童貫は致仕させられている。⁽¹⁷⁾かえつて蔡攸はひと月前の六月に少師を以て領樞密院事となり、童貫の後任という形で執政に出世しているのである。⁽¹⁸⁾

そして、ここでようやく「はじめに」の舞臺に戻ることになる。宣和末、金軍の南侵を受けて徽宗が一芝居を打った讓位劇はすでに見た通りであるが、その場面に蔡攸は一切登場していなかつた。だが實はその脚本作りに蔡攸は大きく関わつてゐた。禪讓當日の様子について述べる別の史料、岳珂『程史』卷八「玉虛密詞」は

明くる日、遂に玉華閣に御し、宰執を召して、「傳位東宮」の四字を書き、以て蔡攸に付す。⁽¹⁹⁾

と記す。また別史料では

將に内禪を謀らんとするに及び、親しく「傳位東宮」字を書して以て（李）邦彥に授く。邦彥卻立して敢えて承けず。時に中輩側に在り、徽宗躊躇し、以て（蔡）攸に付す。⁽²⁰⁾

とあり、はじめは次相たる少宰兼中書侍郎の李邦彥に「傳位東宮」の紙を渡そうとしたのだが、邦彥はあえて受け取ら

うとせず、やむなく蔡攸に手渡したのだった。よって冒頭の劇で、瀕死の（ふりをした）徽宗が皇太子への禪讓の意思を震える左手で書き示した大臣らの中に、蔡攸もいたのである。蔡攸としては自らは裏方に徹し、重要な役回りを演ずることは考えていなかったに違いなからうが、李邦彥らの拒否により、やむを得ない登場となった。その後召し出されて草詔を行う吳敏は、はじめから蔡攸と打ち合わせがなされていた演者の一人であった。⁽¹⁷⁾

蔡攸・吳敏が禪讓劇に絡んでいたという噂は後々まで朝野で有名だったらしく、二十年近く経った南宋・紹興年間になっても、高宗がこれをわざわざ否定せねばならないほどであった。⁽¹⁸⁾ そもそも吳敏は蔡京が氣に入って自分の娘を娶らせようとしたほどで、蔡京家に養われ、⁽¹⁹⁾ 蔡攸と知己であることは當然であった。

さらに蔡攸・吳敏だけでなく、徽宗に禪讓を勧めるよう吳敏に進言したという李綱も、⁽²⁰⁾ もともと蔡氏の門弟であり、實際のところは蔡攸・吳敏・李綱の三人が禪讓のお膳立てを行ったものと思われる。いずれにせよ徽宗の意思を無視して事が運ばれるはずがなく、ひそかにその意を受けて脚本が書かれ、事が運ばれたに違いない。そして最初にその意を受けたのが蔡攸であった。

當時蔡攸は禁中に出入し、密旨を刺^{うかが}い得て、吳敏・李綱に報じ、二人をして進用し、己が肘腋と爲さしめんと欲する⁽²¹⁾ あるいは

伏して見るに李綱は本と凡才を以て、誤りて器使を膺け、蔡氏の門に卵翼せられ、傾心の死黨たり。上皇將に内禪の意有るに逮び、攸先ず刺探し、綱を引いて援と爲し、策立の功を冒さしむ。⁽²²⁾

といった當時の彈劾文は、いずれも蔡攸・吳敏・李綱三人のうち、まず蔡攸が徽宗の意圖を窺って行動していたことを非難したものである。

「はじめに」における禪讓の日、領樞密院事で執政であった蔡攸は「大臣」の一人として宣和殿に徽宗を訪ね、一芝

居を打ったのだった。臺本では宰相に受け取らせるはずであったのが、その宰相が沈黙を続け、受け取りを拒否するというアクシデントが発生したが、咄嗟に蔡攸が何食わぬ顔をして讓位の紙を受け取り、打ち合わせ通り外で待っていた吳敏を呼び入れて讓位の詔を作成させた、というのが真相であろう。この日は最初から最後までまさしく禪讓「劇」だったのである。

徽宗と蔡攸、兩者の蜜月はさらに続く。禪讓を終えて上皇となった徽宗は靖康元年正月四日、こっそりと開封城を抜け出すが、そこに付き添うのは蔡攸と宦官らであった。⁽¹⁵⁾その後かりそめの講和を結び、金軍が一旦撤退したのち、上皇を開封に迎え入れ、兩帝並立の危機を回避して欽宗を安心させえた陰にも、蔡攸と吳敏・李綱らの盡力が大きかった。⁽¹⁶⁾『建炎以來繫年要錄』卷一・靖康元年條は次のように言う。

始め上皇 鎮江に留まりて未だ返らず、幸臣・寧遠軍節度使・吳縣の朱勔は上皇を邀えて其の里第に幸せしめんとし、朝廷 之を憂う。少宰吳敏 蔡攸をして上皇に北歸を勧め、以て罪を贖わしめんことを請う。四月己亥、上皇京師に還る。⁽¹⁷⁾

すなわち欽宗朝の執政となって開封に残った吳敏が、徽宗に付き従っていた蔡攸とのコネクションを利用し、その身の保全と引き替えに上皇の開封歸還を説得させたのである。⁽¹⁸⁾結果、徽宗はその説得に應じて帰還するのだが、途中まで李綱が出迎えに参じたのも、彼が蔡攸と近い人物であることを踏まえての欽宗の指示であろう。これら吳敏・李綱らの動きからは、當時の政界において、徽宗に對する蔡攸の影響力が如何に認識されていたかが窺える。⁽¹⁹⁾

以上見てきたように、徽宗と蔡攸の關係は、徽宗の即位前から、退位して南方に脱出し、開封に戻るまで一貫して續いており、蔡攸は常に徽宗の側近くで仕えることができていた。蔡攸は徽宗とのつながりの上に、後宮との姻戚關係を通じて禁中とつながる一方、宣和殿に出入すべく、宦官貼職の延長上に宣和殿學士となっていたと考えられる。宣和殿

の學士職は、いわば蔡攸が禁中の徽宗とつながるための制度的裏付けであったに違いなく、逆に言えばそれ以上でも以下でもない特別なポストであった。

おわりに

筆者は前稿「宋代の殿中省」において、殿中省が徽宗朝に限って設置され、蔡京の姻族である宋昇や孫である蔡行が領殿中省事に長期間就任していた事實から、蔡京は宦官以外にも彼らを通じて徽宗の私生活を把握し、政權維持に不可欠な皇帝の意思の取り結びを行っていたと推測した。⁽¹³⁾ その結論自體に誤りはないと思うが、さらにもう一つの手段として今回宣和殿學士の存在が考えられ、それは當初の豫想よりもはるかに大きなものであることが判明した。なぜなら宣和殿は禁中の中でも徽宗が一日の大半を過ごし、當時の政治システムにとって重要な御筆作成も行われた重要な場所であり、學士職はその場に出入できる特權を有していたからである。蔡行が宣和殿大學士をもって殿中省を支配していたことは、二つのポストの重要性を物語るものである。

しかし何と言っても宣和殿學士職に大きく関わっていたのは蔡行の父・蔡攸であり、學士職そのものが徽宗と蔡攸の關係の上に成立、發展したものだ。これまで一般にはあまり注目されてこなかった蔡攸であるが、實は父・蔡京よりも徽宗との距離は近く、第一期から第三期までの蔡京專權體制の陰で、禁中における蔡攸の存在は、政權の下支えとして無視できない存在であった。蔡京失脚につながる政治的な動きに對し、蔡攸が禁中においてしばしばその芽を摘んでいたことはすでに見たとおりである。

さてそれではこのような皇帝周邊における蔡攸・蔡行らの存在は、宋代政治史の上でどのように認識すべきであろう

か。これを考える上で無視しえないのは、やはり御筆の存在であろう。皇帝の宸筆であることを建て前に、宰相・執政すら飛び越えて下される命令文書の登場は、すでに徳永氏が論じているように、從來宰執という諮問機關によって制御されていた皇帝の意思が、御筆という命令文書の形をとって直接執行機關に下されるようになり、やがて明初において皇帝が六部を直接指導する體制やその後の内閣・司禮掌印太監の制度へとつながる、その先蹤であったと考えられる⁽¹⁸⁾。これは宋代の特徴としてこれまで言われてきた「士大夫政治」と呼ばれる仕組み（それが實在したかどうかも含めて改めて検討が必要だが）と比べると、皇帝權・宰相權の對立軸から見た場合、相對的に皇帝權の伸長があつたものと思われる。その背景には皇帝の絶對化・權威化を中軸として、皇帝中心の經濟體制・教育體制の樹立を目指した王安石による熙寧の新法改革と⁽¹⁹⁾、皇帝の下に宰相を含めた官僚集團を階層的秩序で體系化しようとした神宗による元豐の官制改革がしからしめたものと思われる⁽²⁰⁾。

それを踏まえた上で、神宗の内降手詔を濫觴とする御筆は、從來のそれが、君主の恣意性が具現化した例外的な命令文書であつたのに對し、法的根據を有する恆常的な制度として登場したところに大きな特徴がある。したがっていくら覆奏の原則を打ち立てたところで、その存在自體が從來の宰執・臺諫ら士大夫を中心とした政治運營の枠組みそのものを崩してしまう危険性を胚胎したものであつた。そしてその危険は他ならぬ蔡京にとつても同じことであり、事實すで見たとように宣和年間、宰相たる蔡京の關知しえないところで、宦官らによる恣意的な御筆が行下されていたと言われる。

すなわち蔡京は自らの政權安定のためには、宰執集團や言路官などの士大夫集團を押さえるだけでなく、御筆が作成される皇帝の近邊にも睨みをきかせておかねばならなくなった。從來そこに童貫をはじめとする宦官集團との折り合いが存したとされていたが、御筆作成の現場に出入し得る宣和殿學士や殿中省のポストを握った子・孫である蔡攸・蔡行

らを通じて、より直接的に禁中とつながっていたのである。そしてこの体制は、そもそも蔡攸が徽宗との繋がりをもつて禁中に留まりえたことから始まっており、それがあってこそその十五年間の蔡京政權であった。

宣和殿で御筆を代筆していたと言われる楊球は、もと蔡京家の家吏の子であり、蔡攸は楊球とは舊知の間柄、もつと言えば舊主であった。禁中の宣和殿における蔡攸の存在は、無軌道に陥っていたという御筆作成に一定の影響力を持ったことは想像に難くない。

靖康元年になって陳過庭が

罪惡の著れしもの、蔡攸より甚だしきは莫し。京の擅權專政に當たり、彼は則ち陰謀詭計を以て宮禁に出入し、外には異同を示し、中には實に附會す。童貫師を興し亂を召すに及び、彼も又た之に副し、出でて邊隙を構え、歸りて重賞を冒す。襦袴の資を以て高位に當たり、斗筲の器を以て重兵を握る、國を蠹ばみ民を害すること、京・貫に亞ぐ、竄殛の罰、以て免かるべからず。⁽¹⁸⁾

と彈劾するのは、當時蔡攸が果たしていた役割を的確に指摘したものであろう。

宣和殿Ⅱ保和殿の學士職は、北宋が滅びた後も南宋に繼承された。しかし宣和殿が存在せぬ以上、すでに實態を伴わない名譽稱號と化していく。⁽¹⁹⁾ 本稿で見たような宣和(保和)殿學士の姿は、北宋末徽宗朝という時期だからこそ見られたものであった。

注

(1) 『會編』卷二五・政宣上・宣和七年十二月二十二日條

又曰、初粘罕之犯境也、茹越寨得虜之牒文、及開拆乃檄書、其言不遜、所不忍言。貫得之歸、與大臣議、恐傷天子意而不敢奏。時又議下詔求言、而詔本數改易、未欲下也。へ貫奉命乃宣撫河

北・河東諸路、及其通也無上命而遽還。宰相・樞府咸不能詰、方引之都堂、共商議下求言詔。又不召翰林學士、乃用貫參謀宇文虛中撰辭、大凡皆不正。李丞相邦彥謂「不若以檄書進、用激聖意、冀得求言之詔亟下爾。」二十三日早、大臣於宣和殿中以檄書進呈、上果涕下無語、但曰「休休、卿等晚間來商量。」

是晚、大臣既再對於玉華、而宇文虛中與吳敏適亦請對。上謂大臣曰「卿等可候、引虛中及敏對罷、卻來相見。」虛中對、後次敏見。遂及禪議、上因留敏于外、少俟、復召大臣、忽氣塞不省、墜御牀下。近臣急呼左右扶舉、僅得就保和殿之東閣。羣臣共議、以再進湯藥、俄少甦、因舉臂索紙筆、上以左手寫曰「我已無半邊也、如何了得大事。」大臣無語。又書「諸公如何又不語耶。」左右顧、無應者、遂自書曰「皇太子某其可即皇帝位、予以教主道君退處龍德宮。」又謂吳敏「朕自拔擢、今日不負朕、可呼來作詔。」禪位詔、敏辭也。時敏草詔進入、上手指其後曰「自此可稱『予』。」遂召東宮來視疾、至則大臣當榻前諭旨、以御袍衣之。東宮因頓首辭、且謂之「受則不孝矣。」舉體自撲、終不敢當、因亦得疾。太上天又命召中宮、至、同加敦諭曰「官家老矣、吾夫婦欲以身託汝也。」猶力辭、上堅命立之、是為孝慈淵聖皇帝。初敏見、建牧、深以為未快、必一切付之而後可。時太上意切於避狄、故敏適以是晚對、因得進言、促成大計、謂必付託之重、而後可去。故太上尤善之、遂內禪。

以下、『會編』は光緒三十四年刊本に據る。光緒四年鉛印本・四庫全書本には「玉華」の後に「閣」字あり。

この禪讓の場面に言及するものとして、小栗英一「徽宗下の宇文虛中」(『人文論集』(静岡大學人文學部)二六、一九七五年)があるが、その解釋は表面的なものに止まる。特に徽宗が苦心して演じた半身不隨の演技を眞に受けておられる。

平田茂樹「科擧と官僚制」(山川出版社「世界史リブレット」、一九九七年)、同氏「宋代の宮廷政治」「家」の構造を手掛かりとして(『笠谷和比古編「家」の比較文明史的考察(公家と武家II)』思文閣出版、一九九九年)参照。

現在三種残る元刊本『事林廣記』(後至元刊本一種、至順刊本二種)のうち、後至元刊本には該圖が無く、最も古い至元年間の姿

(4)

を残すと言われる和刻本(底本は泰定二年刊本)にも無い。『事林廣記』の成立と版本については森田憲司「『事林廣記』の諸版本について―國內所藏の諸本を中心に」(『宋代史研究會編「宋代の知識人―思想・制度・地域社會」』汲古書院、一九九三年)、宮紀子「『混一疆理歷代國都之圖』への道―14世紀四明地方の「知」の行方」(藤井讓治・杉山正明・金田章裕編「繪圖・地圖からみた世界像」京都大學大學院文學研究科、二〇〇四年。のち宮紀子「モンゴル時代の出版文化」名古屋大學出版會、二〇〇六年)3―2「類書の中の地圖と地誌」を参照。

(5)

久保田和男「宋代開封の研究」汲古書院、二〇〇七年。例えば次のようなものが見られる。

周藤吉之「北宋における方田均稅法の施行過程―特に王安石・蔡京の新法としての―」『中國土地制度研究』東京大學出版會、一九五四年。

草野祐子「北宋末の市舶制度―宰相・蔡京をめぐる―」『史艸』二、一九六二年。

中嶋敏「北宋徽宗朝の大錢について」『和田博士古稀記念 東洋史論叢』一九六一年。

同氏「蔡京の當十錢と蘇州錢法の獄」『駿臺史學』三六、一九七五年。

同氏「北宋徽宗朝の夾錫錢について」『東洋研究』四〇、一九七五年。

近藤一成「蔡京の科擧・學校政策」『東洋史研究』五三一、一九九四年。

王瑞來「徽宗と蔡京―權力の絡み合い」『アジア遊學』六四「特集 徽宗とその時代」勉誠出版、二〇〇四年。

金榮濟「北宋徽宗代の財政政策」『アジア遊學』六四。

平田茂樹「徽宗朝の文書行政」『アジア遊學』六四。

(6) 林大介「蔡京とその政治集團——宋代の皇帝・宰相關係理解のための一考察」『史萌』三五、二〇〇三年。

(7) また張邦煒『宋代政治文化史論』（人民出版社、二〇〇五年）があり、徽宗朝における士大夫の動勢や宦官の跋扈、皇位繼承に絡む争いなどの諸問題を論じており、大いに参考となる。他に徽宗朝の官制改革を扱ったものとして、張復華「宋徽宗朝官制改革の研究」（『人文及社會科學集刊』三一、一九九〇年。のち同氏『北宋中期以後の官制改革』文史哲出版社、一九九一年）がある。熙寧八年、造睿思殿。へ在欽明殿西。睿思之右建延春閣。哲宗以睿思殿先帝所建、不敢燕處。乃即睿思殿之後、爲宣和殿。紹聖二年四月二日丁卯、宣和殿成。徽宗晝日不居寢殿、以睿思爲講禮・進膳之所、就宣和燕息。大觀二年、再葺。徽宗爲記、書之石。重和元年、改元宣和、乃更爲保和殿。へ宣和二年改。宣和之後殿、重和元年所創也。へ政和五年四月、置宣和殿學士。宣和元年、改保和。へ

(8) これは徐松輯『宋會要輯稿』（以下『宋會要』と略稱）方域一一一九「東京雜錄」の方がやや詳しい。
(紹聖二年四月二日、宣和殿成。初哲宗以睿思殿先帝所建、不敢燕處。乃即睿思殿之後、有後苑隙地僅百許步者、因取以爲宣和殿焉。宣和殿者、止三楹、兩側後有二小沼、臨之以山殿、廣袤數丈、制度極小。後太皇太后垂簾之際、爲臣僚論列、遂毀拆獨餘其址存焉。及徽宗親政、久之、宣和於是旋復。徽宗亦踵神宗・哲宗故事、晝日不居寢殿、又以睿思時殿爲講禮・進膳之所、乃皆就宣和燕息。大觀二年、既再繕葺之、徽宗乃親書爲之記、甚詳、而刻諸石。及重和元年、議改號、因即以爲宣和元年、乃改宣和殿爲保和殿者。宣和之後殿、重和元年所創也。同書・方域一一二〇
宣和二年二月一日、詔、宣和已紀年號、殿名易爲保和殿。

(9) 『宋史』卷八五・地理志・京城

宣和殿へ在睿思殿後。紹聖二年四月殿成、其東側別有小殿曰凝芳、其西曰瓊芳、前曰重熙、後曰環碧。元符三年廢、崇寧初復作。大觀三年、徽宗製記刻石、實蔡京爲之。……玉華閣へ大觀初建、在宣和殿後。

(10) 『宋史』卷二一・徽宗本紀・宣和元年
二月庚辰、改元。易宣和殿爲保和殿。

(11) 宣和殿後、又創立保和殿者、左右有稽古・博古・尚古等諸閣、咸以貯古玉印璽、諸鼎彝禮器、法書圖書盡在。

(12) 『皇朝編年綱目備考』卷二八・政和三年九月「保和殿成」

乃詔有司、徙屯營於宮垣之外、移百官舍宇、俾就便利、得其地遷延福宮於宮城之北、即延福舊址作保和殿。五楹挾三、東側殿曰出光、西側殿曰葆光、保和之後有殿曰燕頤、兩傍有殿曰怡神、曰凝神、其楹數如保和。總爲屋七十五間。工致其巧、人致其力。始於四月癸巳、至九月丙午殿成。上飾純綠、下漆以朱、無文藻繪畫五彩、垣墉無粉澤、淺墨作寒林平遠禽竹而已。前種松竹・木樨・梅・橙・橘・蘭・蕙、有歲寒秋香・洞庭吳會之趣。後列太湖之石、引滄浪之水。陂池連綿、若起伏、支流派別、縈繞清泚、有瀛州方壺・長江遠渚之興。左實典誥・訓謨・經史、以憲章古始、有典有則。右藏三代鼎彝俎豆・敦盤尊彝、以省象制器、參於神明、薦於郊廟。東序置古今書畫、第其品秩、玩心游思、可喜可愕。西夾收琴阮筆硯、以揮毫灑墨、放懷適情。

(13) 宴は九月一日ではなく十二日にあったとされる。史料は後述（後掲注（21））。

(14) ここで言う「保和新殿（B）」も史料によつては單に「保和殿」と記されることがある。本稿では「保和殿（A）」「保和新殿（B）」と區別して呼稱する。

(15) 王明清『揮麈後錄餘話』卷一・蔡京「太清樓特宴記」、「保和殿曲

(16)

燕記」。うち「太清樓特宴記」は莊紳『難肋編』卷中と『皇朝編年綱目備要』卷二八・政和二年四月「燕蔡京内苑」にも載せられている。『宋史』卷二〇三・藝文志・傳記類には徽宗の書として「太清樓特宴記」一卷があり、明・葉盛『水東日記』卷二五にも「徽宗親書「太清樓特宴記」といい、開封府學の壁に刻石されていたという。後掲注(54)参照。

(17)

『宋史』卷二一・徽宗本紀においては、政和二年四月「甲午、宴蔡京等于太清樓」とし、日時が違っている。

祐陵癸巳歲、蔡元長自錢塘趣召再相、詔特錫燕於太清樓、極承平一時之盛。元長作記以進云「政和二年三月、皇帝制詔、臣京有過責愆、復官就第。命四方館使・榮州防禦使臣童師敏齋詔召赴闕、臣京頓首辭。繼被御札手詔、責以大義、惶怖上道。於是飲至於郊、曲燕于垂拱殿、祓禊于西池、寵大恩隆、念無以稱。

上曰『…』詔以是月八日開後苑太清樓、命內客省使保大軍節度觀察留後帶御器械臣譚稹・同知入內侍省事臣楊戩・內客省使保康軍節度觀察留後帶御器械臣賈祥・引進使管州管内觀察使勾當內東門司臣梁師成等五人、總領其事。西上閣門使忠州刺史尙藥局典御臣鄧忠仁等一十三人、掌典內謁者職。有司請辦具上、帝弗用。前三日、幸太清、相視其所、曰『於此設次』……教坊請具樂奏、上弗用、曰『後庭女樂、肇自先帝。隸業大臣未之享。』其陳於庭、上曰『不可以燕樂廢政。』是日、視事垂拱殿。

退、召臣何執中・臣蔡京・臣鄭紳・臣吳居厚・臣劉正夫・臣侯蒙・臣鄧洵仁・臣鄧居中・臣鄧洵武・臣高俅・臣童貫崇政殿閣弓馬所子弟武伎、引強如格、各命以官。遂賜坐、命宮人擊鞠。臣何執中等辭請立侍、上曰『坐』、乃坐。於是馳馬擧仗、翻手覆手、丸素如綴。又引滿馳射、妙絕一時、賜賚有差。乃由景福殿西序入苑門、就次以憩。詔臣蔡京曰「此跬步至宣和、即昔言者所謂金柱玉戶者也、厚誣宮禁。其令子攸掖入觀焉。」東入小

(18)

花逕、南度碧蘆叢、又東入便門、至宣和殿。止三楹、左右挾、中置圖書・筆硯・古鼎・彝・疊・洗。陳几案臺榻、漆以黑。下字純朱、上棟飾綠、無文采。東西廡側各有殿、亦三楹、東曰瓊蘭。積石爲山、峯巒間出。有泉出石竇、注於沼北。有御札「靜」字榜梁間、以洗心滌慮。西曰凝方、後曰積翠、南曰瑤林、北洞曰玉宇。石自壁隱出、巖巖峻立、幽花異木、扶疎茂密。後有沼曰環碧、兩旁有亭曰臨漪・華渚。沼次有山、殿曰雲華、閣曰太寧。左躡道以登、中道有亭、曰琳霄・垂雲・鸞鳳・層巒、不大高峻、俯視峭壁攢峯、如深山大壑。次曰會春閣、下有殿曰玉華。玉華之側有御書榜曰「三洞瓊文之殿」、以奉高真。旁有種玉綠雲軒相峙。…」

ちなみに宣和殿における曲宴は政和五年にも開かれた。周輝『清波雜志』卷八

政和五年四月、燕輔臣於宣和殿。先御崇政殿、閱子弟五百餘人馳射、挽強精銳、畢事賜坐、出宮人列于殿下、鳴鼓擊柝、躍馬飛射、翦柳枝、射繡毬、擊丸、據鞍開神臂弓、妙絕無倫。衛士皆有愧色。上曰「雖非婦事、然女子能之、則天下豈無可教。」臣京等進曰「士能挽強、女能騎射。安不忘危、天下幸甚。」見「從游宣和殿記」。

李塹『皇宋十朝綱要』卷一七・政和五年四月乙丑條

召宰執等、閱臣庶子弟五百餘人武技於崇政殿。因至宣和殿、賜宴於苑中、蔡京作曲宴記。

このときも蔡京によって文章が作成されていたようであるが、今に傳わらない。

なお、このような曲宴の情景から窺える徽宗・蔡京の關係について、繪畫資料と詩を題材に考察したものに衣若芥「天子の盛宴―徽宗「文會圖」とその題畫詩」(村越貴代美譯、『橄欖』一四、二〇〇七年)がある。

(19) 前掲注(9)引用史料。また王明清は『玉照新志』巻二では

乃若天子燕息之所也。宣和祕殿、翟飛跋翼、憲睿思之始謀、因紹聖之故迹。凝芳・瓊蘭・重環・照碧、輪焉奐焉、光動兩側。聽政之暇、來遊來息。搜古制於鼎彝、縱多能於翰墨、致一凝神、優入聖域。爰命近臣、於焉寓直、警啓沃之丹誠、庶密效於裨益。としており、宣和殿の左右の殿名は「瓊蘭殿・凝芳殿」が正しいであろう。その位置は「揮塵錄」と『宋史』では東西が逆になっている。今【圖3】では「揮塵錄」に従っておく。

(20) 現在では「石鼓」は戰國秦のものと考えられているが、當時は周・宣王の時のものと考えられていた。はじめ蔡京が辟雍に置いたが、後に禁裏に入れられたという。唐蘭「石鼓年代考」(田中有・譯、『中國書道全集』第一卷、平凡社、一九八八年)参照。

(21) 『揮塵後錄餘話』卷一・蔡京「保和殿曲燕記」

宣和元年九月十二日、皇帝詔臣蔡京・臣王黼・臣越王俣・臣燕王似・臣嘉王楷・臣童貫・臣嗣濮王仲忽・臣馮熙載・臣蔡攸・臣保和殿・臣蔡儵・臣蔡條・臣蔡行・臣蔡徽・臣蔡術・臣賜食文字庫。於是由臨華殿門入、侍班東曲水、朝於玉華殿。上步西曲水、循醑醴架、至太寧閣、登層巒・凌霄・鸞鳳・垂雲亭、景物如前、林木蔽蔭如勝、始至保和殿。三檀、檀七十架、兩挾閣、無綵繪飾侈。落成於八月、而高竹崇桧、已森然蓊鬱。中檀置御榻、東西二間列寶玩與古鼎彝器玉、左挾閣曰妙有、設古今儒書・史子楮墨、右曰宣道、道家金櫃玉笈之書與神霄諸天隱文。上步前行稽古閣、有宣王石鼓。歷遼古・尙古・鑑古・作古・傳古・博古・祕古諸閣、藏祖宗訓謨、與夏商周尊・彝・鼎・鬲・爵・罍・鹵・敦・盤・孟、漢晉隋唐書畫、多不知識、駭見、上親指示、爲言其概。因指閣內「此藏卿表章字札無遺者。」命開櫃、櫃有朱隔、隔內置小匣、匣內覆以綺綺、得臣所書撰「淑妃劉氏制」。臣進曰「札惡文鄙、不謂襲藏如此、念無以稱報。」頓

首謝。抵玉林軒、過宣和殿・列岫軒・天真閣・凝德殿。殿之東、崇石峭壁高百丈、林壑茂密、倍於昔見。過翠翹・燕閣諸處、賜茶全眞殿。上親御擊注、湯出乳花盈面。臣等惶恐前曰「陛下略君臣夷等、爲臣下烹調、震悸惶怖、豈敢啜。」頓首拜。上曰「可少休。」乃出瑤林殿。中使馮皓傳旨留題殿壁、喻臣筆墨已具。乃題曰「瓊瑤錯落密成林、桧竹交加午有陰。恩許塵凡時縱步、不知身在五雲深。」頃之就坐、女童樂作。坐間賜荔子・黃橙・金柑、相間布列前後。命鄧文浩剖橙分賜。酒五行、再休許、至玉眞軒。軒在保和西南廡、即安妃粧閣。命使傳旨曰「雅燕酒酣添逸興、玉眞軒內看安妃。」詔臣賡補成篇。臣即題曰「保和新殿麗秋輝、詔許塵凡到綺闌。」方是時、人自謂得見妃矣、旣而但畫像掛西垣。臣即以謝奏曰「玉眞軒檻暖如春、只見丹青未有人。月裏常娥終有恨、鑑中姑射不應眞。」須臾、中使召臣至玉華閣、上手持詩曰「因卿有詩、況烟家、自當見。」臣曰「頃緣葭莖、已得拜望、故敢以詩請。」上大笑。妃素粧、無珠玉飾、綽約若仙子。臣前進再拜敘謝、妃答拜、臣又拜、妃命左右掖起上手持大觥酌酒命妃曰「可勸太師。」臣奏曰「禮無不報、不審酬酢可否。」於是持瓶注酒、授使以進。再坐、徹女童、去羯鼓、御侍奏細樂、作「蘭陵王」「揚州散」古調。酬勸交錯、上顧羣臣曰「桂子三秋七里香。」七里香、桂子名也、臣楷頃許對曰「麥雲九夏兩歧秀。」臣攸曰「難舌五年千歲棗。」臣曰「菊英九日萬齡黃。」乃廣載歌曰「君臣燕衍昇平際、屬句論文樂未央。」臣奏曰「陛下樂與人同、不聞高卑。日且暮、久勤聖躬、不敢安。」上曰「不醉無歸。」更勸迭進、酒行無算。……夜漏已二鼓五籌、衆前奏巧罷、始退。十三日、臣京序。

(22) 前掲注(11)引用史料。

(23) このような中央の本殿に左右から挾屋造の閣が加えられる造りは、繪畫資料で言えば傳張擇端作「金明池爭標圖」(天津市藝術博物

館藏)に見える臨水殿のような建物のことであろう。

- (24) 『大金國志』卷三三・地理「汴京制度」には金代の開封の様子が描かれ、宣和殿があつたと思しき場所の記述には「(仁智)殿後石壘成山、高百尺、廣倍之。最上刻石曰「香石泉山」、山後挽水上山、水自上流下、至荆玉澗、又流至湧翠峯。」といい、築山はそのまま残つていたようである。元・白珽『湛淵靜語』卷二「使燕日錄」も同内容。ただし山名は「百泉山」とする。

- (25) 前掲注(12)引用史料。

- (26) 久保田和男「北宋徽宗時代と首都開封」(『東洋史研究』六三—四、二〇〇五、のち前掲注(4)書)第二章a「明堂と延福宮の建設と蔡京政權」参照。

- (27) 『宋史』卷八五・地理志

延福宮へ政和三年春、新作於大内北拱辰門外。舊宮在後苑之西南、今其地乃百司供應之所。

- (28) 紹興年間、和議によって開封が一度南宋の手に戻ったとき、南宋の使者が開封城内を確認に来ており、その記録が「建炎以來繫年要錄」卷一二九・紹興九年條に残されている。

六月己酉朔、簽書樞密院事樓炤與東京留守王倫同檢視修內司、趣入大慶殿、……入睿思殿門、登殿、左曰「玉鑾」、右曰「清徽」、後曰「宣和殿」、庭下皆修竹、自此列石爲山、分左右斜廊、爲複道・平臺。臺上過玉華殿、殿後有軒曰「稽古」、西廡下曰「尙書內省」。西出後苑、至太清樓下。

彼らは宣和殿などを見た後、「西のかた後苑に出」でっており、宣和殿は後苑の東に位置した。

- (29) 嚴密には、遼にあつた年號は「重熙」であつたが、のち避諱のために「重和」と稱されていたという。蔡條『鐵圍山叢談』卷一「重和者、謂「和之又和」也。改號未幾、會左丞范致虛言犯北朝年號。蓋北先有重熙年號、時後主名禧、其國中因避「重熙」、

凡稱「重熙」則爲「重和」、朝廷不樂。是年三月、遽改重和二年爲宣和元年。宣和改、上自以常所處殿名其年、然實欲掩前誤也。

- (30) 『宋會要』職官七一〇・宣和元年二月一日條

御筆、宣和祕殿名稱已標紀元號、所有見行帶領宣和殿職事、易以保和殿爲名、應干班綴敘位・雜壓恩數等、並仍舊。

「雜壓」は合班のことで、文・武・寄祿・館職・差遣など種類が異なるものを一つの宮中序列にまとめたもの。『朝野類要』卷二「雜壓」参照。

宣和殿改稱の時期についても諸史料で錯綜している。上記の『宋會要』は宣和元年二月一日とするが、同じ二月一日附けで同内容を示す『宋會要』方域一一〇は「宣和二年二月一日、詔、宣和已紀「犯」年號、殿名易爲保和殿。」とし、一方全く同文である『宋會要』儀制三十四五は「宣和二年二月四日」とする。そしてすでに見たように『玉海』も宣和二年改稱とする。宣和改元は『宋史』卷二二・徽宗本紀に「(宣和元年)二月庚辰、改元。易宣和殿爲保和殿。」とあり、殿名改稱についても一見宣和元年二月を支持するかに見えるが、重和二年Ⅱ宣和元年二月は丁丑が朔であつて、庚辰は四日である。すなわち嚴密には宣和元年に二月一日は存在しない。よつて諸史料で出入りはあるものの、宣和二年二月一日に改稱の御筆が出された蓋然性が高い。ちなみに『會編』卷四では三月丁未朔を改元の日とする。また黃以周等輯注『續資治通鑑拾補』卷三九に諸史料を引用して考察している。

- (31) この結論からは、結局のところ保和殿が二箇所存在することになる(後苑の東・西)。ただ諸史料に現れる「保和殿」はそのほとんどが稽古など諸閣を伴っており、本稿で言うところの保和新殿(B)に當たるものを指している。ここから考えれば、當初後苑の西に出來た殿(A)を一度は「保和殿」と名附けたものの、のち

に宣和殿の後方にも「保和殿」(B)を造り、さらにそれが宣和殿を含めた總稱として、職名にも使用されるようになる。もとの殿(A)は「保和殿」の呼稱を失ったのではないか。前掲注(27)の『宋史』地理志が「今其の地は乃ち百司供應の所」と曖昧に表現し、「保和殿」と言わないのはそのためではなからうか。以上は推測の域を出ないが、後述するように政治的意義を有する「保和殿」が、本稿でいう保和新殿(B)に當たることだけは確かである。前掲注(8)参照。

(33) 『玉海』卷五六・藝文・「宣和博古圖」

政和二年七月己亥、置禮制局。三年六月庚申、因中丞王甫乞頒宣和殿博古圖、令儒臣考古制度、遂詔討論三代古器及壇壝之制、改作俎豆簠簋之屬。：『中興書目』博古圖三十卷、宣和殿所藏彝鼎古器、圖其形、辨其款識、推原制器之意、而訂正同異。

(34) 邵博『邵氏聞見後錄』卷二七

宣和殿聚殷周鼎・鍾・尊・爵等數千百種。國破、虜盡取禁中物、其下不禁勞苦、半投之南壁池中。後世三代彝器、當出于大梁之墟云。

(35) 桑世昌『蘭亭考』卷六所載「沈癸跋」

舊見里中人藏此本、卷末有何子楚跋語云「……大觀間、詔取石龕置宣和殿。丙午、與岐陽石鼓、俱載以北。」子楚。

(36) 『鐵圍山叢談』卷六

太上受命、享萬乘至尊之奉、而一時諸福之物畢至、如好奇賞異、故天下瑰珠舉入尚方、皆萃於宣和殿小庫。宣和殿小庫者、天子之私藏也。

宋代の財庫については周知の通り、梅原郁氏に「宋代の内藏と左藏―君主獨裁制の財庫―」(『東方學報(京都)』四二、一九七一年)があり、その「三 第三の財庫」に「宣和庫」が登場する(二五八頁)。これがここに言う「宣和殿小庫」といかなる關係に

あったかは今のところ不明である。

(37) 『宋史』卷四六八・宦者傳・梁師成傳

會鄭望之使金營還、帝命師成及望之以宣和殿珠寶玉器玩復往。先令望之詣中書論宰相、至則留之、始詔暴其罪、責爲彰化軍節度副使。

鄭望之の遣使は同書卷三七三・鄭望之傳にも載り、やはり「以珠寶遺金人」と言う。

(38) 以下、宋朝における宮廷書庫の様子については、封思毅「宋代圖書政策」(『國立中央圖書館館刊』二二―一、一九八九年)、傅璇琮・謝灼華編『中國藏書通史』(寧波出版社、二〇〇一年)「第五編 宋遼夏金元藏書」第二章「宋代官府藏書」、書畫收藏も含めた祕閣・祕書省の沿革については、彭慧萍「兩宋宮廷書畫儲藏制度之變：以祕閣爲核心的鑑藏機制研究」(『故宮博物院院刊』二〇〇五―一)参照。

(39) 袁褰『楓窗小牘』卷下

崇寧二年五月、祕閣書寫成二千八百二部、未寫者一千二百十三部、及闕卷二百八十九、立程限繕錄。

(40) 『宋會要』崇儒四―一九・大觀四年

五月七日、祕書監何志同言「漢著『七略』、凡爲書三萬三千九百卷、隋所藏至三十七萬卷、唐開元間八萬九千六百卷。慶曆間、常命儒臣集四庫爲籍、名之曰『崇文總目』、凡三萬六百六十九卷。慶曆距今未遠也、按籍而求之、十纔六七、號爲全本者不過二萬餘卷、而脫簡斷編・亡散門(闕)逸之數浸多。謂宜及今有所搜採、視慶曆舊錄有未備者、頒其名數於天下、選文學博雅之士、求訪『總目』之外、別有異書、竝借傳寫、或官給劄、即其家傳之、就加校正、上之策府。」從之。

(41) 『楓窗小牘』卷下

政和七年十一月十四日戊戌、校書郎孫觀奏「四庫書尚循『崇

(42)

文」舊目、頃訪求遺書、總目之外、凡數百家、幾萬餘卷。請撰次增入總目、合爲一卷。」詔觀等撰次、名曰「祕書總目」。

『文獻通考』卷一七四・經籍考・總序

政和七年、校書郎孫觀言「太宗皇帝建崇文殿爲藏書之所。景祐中、仁宗皇帝詔儒臣即祕書所藏編次條目所得書、以類分門、賜名「崇文總目」。神宗皇帝以崇文院爲祕書省、釐正官名、獨四庫書尙循「崇文」舊目。頃因臣僚建言訪求遺書、今累年所得「總目」之外、凡數百家、幾萬餘卷。乞依景德故事、詔祕書省官、以所訪遺書、討論撰次、增入「總目」、合爲一書。乞別製美名、以更「崇文」之號。」廼命觀及著作佐郎倪濤・校書郎汪藻・劉彥通撰次、名曰「祕書總目」。

『文獻通考』卷一七四・經籍考・總序

宣和初、提舉祕書省官建言、置補寫御前書籍所於祕書省、稍訪天下之書、以資校對。以待從官十人爲參詳官、餘官爲校勘官。進士以白衣充檢閱者數人、及年皆命以官。四年四月、詔曰「朕惟太宗皇帝底寧區宇、作新斯文、屢下詔書、訪求亡逸。策府四部之藏、庶幾乎古、歷歲浸久、有司玩習、多致散缺、私室所閱、世或不傳。可令郡縣諭旨訪求、許士民以家藏書在所自陳、不以卷帙多寡、先具篇目、申提舉祕書省以聞、聽旨遞進、可備收錄、當優與支賜。或有所祕未見之書、有足觀采、卽命以官、議加崇獎、其書錄竟給還。若率先奉行、訪求最多州縣、亦具名聞、庶稱朕表章闡釋之意。」又詔曰「三館圖書之富、歷歲滋久、簡編脫落、字畫訛舛、校其卷帙、尙多逸遺、甚非所以示崇儒右文之意。」「廼命建局、以補全校正文籍爲名、設官總理、募工繕寫、一置宣和殿、一置太清樓、一置祕閣、俾提舉祕書省官兼領。」「凡所資用、悉出內帑、毋費有司、庶成一代之典。」三詔同日而下、四方奇書、自是聞出。

『宋史』卷二一・徽宗本紀

(宣和四年)夏四月丙午、詔置補完校正文籍局、錄三館書置宣和樓及太清樓・祕閣。又令郡縣訪遺書。

『宋史』卷二〇二・藝文志・序言

徽宗時、更崇文總目之號爲祕書總目。詔購求士民藏書、其有所祕未見之書足備觀采者、仍命以官。且以三館書多逸遺、命建局以補全校正文爲名、設官總理、募工繕寫。一置宣和殿、一置太清樓、一置祕閣。自熙寧以來、搜訪補輯、至是爲盛矣。

(43)

『文獻通考』卷一七四・經籍考・總序

(宣和)五年二月、提舉祕書省言「有司搜訪士民家藏書籍、悉上送官、參校有無、募工繕寫、藏之御府。近與三館參校榮州助教張頤所進二百二十一卷、李東一百六十二卷、皆係闕遺、乞加褒賞。」詔、頤賜進士出身、東補迪功郎。七年、提舉祕書省又言「取索到王闡・張宿等家藏書、以三館・祕閣書目比對所無者、凡六百五十八部二千四百一十七卷、及集省官校勘悉善本、比前後所進書數稍多。」詔、闡補承務郎、宿補迪功郎。然自熙寧以來、搜訪補緝、至宣和盛矣。

徐度「卻掃編」卷下

予所見藏書之富者、莫如南都王仲至侍郎家、……(其子)彥朝……宣和中、御前置局求書、時彥朝已卒、其子問以「鎮庫書」獻、詔特補承務郎、然其副本具在。

(44)

『皇朝編年綱目提要』卷二八・政和七年四月條

詔道錄院略曰「朕乃上帝元子、爲太霄帝君、憫中華被金狄之教、遂懇上帝願爲人主、令天下歸於正道。……」尋詔翰林學士承旨王黼・宣和殿學士蔡攸・盛章等至宣和殿觀神霄降臨。

(45)

もとより神霄派の領袖である林靈素による演出であろうが、やはり現實世界における宣和殿の重要性に着目した行動だったと言える。これら林靈素と徽宗朝との関わりについては、吉川忠夫「僧を改めて徳士と爲す―北宋徽宗時代の佛法受難」(『禪學研究』七

九、二〇〇〇年、前掲注(26)久保田論文を参照。

(46) 前掲注(21)引用史料。

(47) 『宋史』卷二四三・后妃傳。

(48) 『續資治通鑑長編紀事本末』卷一二七・道學・政和六年十月甲申條

(49) 蔡條『史補』、政和七年、有林靈素者、溫州人也。……又謂上寵妃劉氏曰九華玉真安妃也。天子心獨喜其說、乃賜號通真先生。太上自即位以來、尤深考慎、雖九重至密、亦不得預知、獨自語學士以姓名而命之也。及晚歲、雖倦萬幾、然每命相猶自擇日、在宣和殿親札其姓名於小幅紙、緘封垂於玉柱斧子上、俾小璫持之導駕於前、自內中出至小殿子、見學士始啓封焉。以姓名垂玉柱斧子、政與唐人金甌覆之何異。

(50) 德永洋介「宋代の御筆手詔」『東洋史研究』五七—三、一九九八年。

(51) 岳珂『寶真齋法書贊』卷二「徽宗皇帝諸閣支降御筆」

右徽宗皇帝、諸閣支降御筆一卷。朱印其旁、卷末著宣受內臣月日姓名。臣謹按蔡條『國史後補』曰「內降自祖宗來有之、但作聖旨行下。崇寧有親筆、乃稱御筆。大觀四年夏、始詔違御筆以違制論。六年春、凡御筆頗不類上字。宣和改元後內降、則又時時作吏體、非宮人筆札。魯公因奏曰『陛下號令、何可由師成使外人書。』上曰『宮人作字、舊樣不佳。朕教之、今其書頗類男子、良可嘉。卿蓋誤矣。』其後始通知。今睿思殿文字外庫使臣、若楊球等掌之、張補等點檢、小閣三四人主出納、用寶以付外、處之于宣和殿之後廊、但謂之東廊、即其所也。寔梁師成統之焉。……是後凡進擬入者、必禱補・球輩、使點竄訛舛、內外相關、而上但謂外廷不知也。臣固嘗疑其書之妄、既得此帖。參以臣家天筆之藏、蓋昭乎其不類也。楊球・張補之跡、蔡京・梁師成之罪著矣。

楊球・張補らが御筆作成に携わり、それが「東廊御筆」と呼ばれていたことは次の史料にも見えてくる。

繇是貴戚・近臣爭相請求、至使中人楊球代書、號曰「書楊」京復病之而不能止矣。(『宋史』卷四七二・姦臣傳・蔡京傳)我朝家法最善、雖一熏篋之微、必由朝廷出令、列聖相承、莫之有改。其後老蔡用事、患同列異議、始請細札以行之。初猶處分大事、既而俯及細微。後不勝多、至使小臣楊球・張補代書、謂之東廊御筆、訖成禍亂。(『歷代名臣奏議』卷一五一「用人」・劉克莊)

(52) 『宋史』卷四六八・宦者傳・梁師成傳

梁師成字守道、慧點習文法、稍知書。初隸賈詳書藝局、詳死、得領睿思殿文字外庫、主出外傳道上旨。政和間、得君貴幸、至竄名進士籍中、積遷晉州觀察使・興德軍留後。……時中外泰寧、徽宗留意禮文符瑞之事、師成善逢迎、希恩寵。帝本以隸人畜之、命入處殿中、凡御書號令皆出其手、多擇善書吏習傲帝書、雜詔旨以出、外廷莫能辨。師成實不能文、而高自標榜、自言蘇軾出子。是時、天下禁誦軾文、其尺牘在人間者皆毀去、師成訴於帝曰「先臣何罪。」自是、軾之文乃稍出。以翰墨爲己任、四方僞秀名士必招致門下、往往遭點污。多置書畫卷軸於外舍、邀賓客縱觀、得其題識、合意者、輒密加汲引、執政・侍從可階而升。王黼父事之、雖蔡京父子亦諂附焉、都人目爲「隱相」、所領職局至數十百。

(53) 黃庭堅『山谷集』卷三に「謝送碾賜壑源揀芽」と題する古詩があり、「睿思殿東金井欄、甘露薦椀天開顏。」との部分に附けられた

宋人任淵の注には、「睿思蓋神宗便殿、有垂拱殿後。」と言い、睿思殿は神宗の便殿であったと認識する。

(54) 明・葉盛『水東日記』卷二五

偶閱舊碑、得徽宗親書「太清樓特宴記」不完本三幅。此石多在

今開封府學牆壁周遭、當時草草打得此、不知尙存他石可完否。
按『宋史』、特宴在政和王辰（二年）去京之死財十五年、亦萬世之大戒也。噫。
太清樓特宴記
……

奮於百世之下、斷而行之、迄用有成。凡厥萬事、其視於茲、因筆以詔天下後世。

政和甲午六月朔日記。

翰林書藝局鐫字藝學

睿思殿御前文字外庫鐫字藝學

臣嚴奇
臣徐珣
臣張士亨
臣朱章
臣邢肅
臣張仲

待 詔

文 書 待 詔
待 詔 賜 緋

臣王公瓌
臣倪士宣
臣封士寧

從 義 郎 臣張士永模刊

睿思殿御前文字外庫祇應武翼郎臣龔邁題寫

通 侍 大 夫 臣梁師成

通侍大夫保康軍節度觀察留後 臣賈管勾上石

(55) 趙彥衛『雲麓漫抄』卷一五

上又制一寶、亦螭紐曰「範圍天地、幽贊神明、保合太和、萬壽無疆。」凡十六字、實命魯公賦其文、篆亦魚蟲、然韻頗不古、乃梁師成所主、命睿思殿文字外庫人爲之、不知爲何人書也。至於制作之工、則幾於秦璽矣。其實大九寸、有檢、亦九寸、古人所無、號曰「定命寶」、合前八寶爲九、下詔、以乾元用九焉。受寶の儀式は、翌八年正月一日に大慶殿で行われた（『宋史』卷

(56) 一五四・輿服志、『清波別志』卷二。

『鐵圍山叢談』卷一にも睿思殿文字外殿庫の關係者が登場する。又有老吏、嘗主睿思殿文字外殿庫事、能言、偶得見秦陵時舊文簿注一行、曰「紹聖三年八月十五日奉聖旨、教坊使丁仙現祇應有勞、特賜銀錢一文。」嗚呼、累聖儉德、類乃如此。

(57) 前掲注(8)引用史料。

前掲注(28)引用史料で、使者は「睿思殿門」から入って舊宣和殿に到っている。また前節において、大觀中、定武蘭亭の刻石が宣和殿に嵌め込まれたことを示したが、龔松「蘭亭續考」卷一に載る榮次新の跋では「宣和中、有旨取舊石置睿思殿。」という。御府に入れられた時期の違いも氣になるが、今は定武刻石の置かれた場所が、一方では宣和殿、もう一方では睿思殿とされていることに注目したい。また傳熹年作製の圖（圖2）もこれを支持している。

(59)

崇寧中、學士洪灌隨進奉使入宋、館於京。時翰林待詔楊球・李革、奉帝敕至館、書圖籙。洪灌、以金生行草一卷示之。二人大駭曰「不圖、今日得見王右軍手書。」洪灌曰「非是。此乃新羅人金生所書也。」二人笑曰「天下除右軍、焉有妙筆如此哉。」洪灌屢言之、終不信。

(60) 『高麗史』卷一一・忠義傳・洪灌傳

(61) 『高麗史』卷一一・肅宗世家・肅宗九年七月辛卯條。

(62)

遺樞密院使崔弘嗣・祕書監鄭文、如宋、謝恩進方物。『皇朝事實類苑』卷五〇「太宗棋品第一」に「棋待詔賈玄」が、『宋會要』職官三六・一一・淳化五年五月條に「琴待詔駱偃」が見える。

また鄧椿『畫繼』卷一〇・「雜說論近」では、「畫待詔」のことであろうが
又諸待詔每立班、則畫院爲首、書院次之、如琴院・棋・玉・百

(63)

工、皆在下。……睿思殿日命待詔一人能雜畫者宿直、以備不測宣喚、他局皆無之也。
 と言い、睿思殿に待詔が詰めていたことが窺える。
 葉夢得『石林燕語』卷五

唐詔令雖一出於翰林學士、然遇有邊防機要大事、學士所不能盡知者、則多宰相以其處分之要者自爲之辭、而付學士院、使增其首尾常式之言而已、謂之「詔意」。故無所更易增損、今猶見於李德裕・鄭畋集中。近歲或盡出於宰相、進呈訖、但召待詔、即私第書寫。或詔學士、宰相面授意、使退而具草、然不能無改定也。

この慣習は葉夢得から見て「近歲」であるので、北宋末か南宋初のものであろう。當時翰林學士の扱う内制が宰相の手になり、さらにその一部が「待詔」を召し出した上、宰相の「私第」で書寫させていたという説は非常に興味深い。宰相の「私第」とはおそらく賜第を指しており、政廳ではなく賜第で一部の政務が決裁されていた徽宗朝後半の話であらう。

『畫繼』卷七「屋木舟車」に登場する劉宗古は「宣和間、以待詔官至成忠郎。」すなわち翰林待詔・成忠郎となっており、楊球の肩書きも當時としては妥當なものだったと思われる。

(65)

『宋會要』選舉三二・一〇・紹興元年

七月三日、詔成忠郎楊球、令中書門下後省召試策一道、與換文資。

九月九日、待御史沈與求言「伏見陛下追復祖宗故事、開詔四方賢雋之士、令中書省策以當世之務、觀其所長、或用之臺省、或儲之館閣、皆極一時之達（選）。若球者係蔡京使臣楊哲之子、今爲敕令所檢閱文字、蓋吏職也。考之衆論、初不聞其有才、夫以使臣而爲吏職、乃得四方賢雋之士、並試於中書、他日或有異能之士、陛下即欲召之、其肯至哉。乞罷球歸於右選、自此以後、

(66)

精加審擇。」從之。
 『建炎以來繫年要錄』卷四七・紹興元年九月壬寅條
 條令所小吏・成忠郎楊球、蔡京家吏楊哲之子也。范宗尹薦於上、令後省策試、授以文資へ七月丁巳日降旨。待御史沈與求以爲不可、乃罷之。

熊克『中興小紀』卷一一・紹興元年九月條も同内容。
 徽宗が宣和殿に寢泊まりしていたかどうかは不明である。歷代皇帝の正寢殿は福寧殿であり、次の史料から少なくとも宣和殿創建以前、徽宗も福寧殿を寢殿としていたことは判明する。『鐵園山叢談』卷一

(67)

崇寧甲申、議作九鼎、有司即南郊爲冶。用中夜時、上爲致肅不寐、至是於寢望之、焚香而再拜焉。既乃就寢、傍四鼓矣。忽有神光達禁中、政燭福寧殿、紅赤異常、宮殿於是盡明如晝、迨曉始熄、鼎一鑄而成。
 『宋史』卷二二・徽宗本紀・政和五年四月
 癸亥、置宣和殿學士。

『宋會要』職官七一・一〇・政和五年四月二十四日條
 可置宣和殿學士、班在延康殿學士之下、以兩制充、聽旨除授。凡厥恩數、並依延康殿學士體例施行。

『宋會要』職官七一・一〇・政和六年四月二十四日條

詔宣和殿學士立班鉞位、在翰林學士之下、諸殿學士之上。
 『宋會要』職官七一・一〇・政和七年六月二日條

宣和殿學士・朝請大夫蔡攸爲宣和殿大學士、官鉞班聯・恩數請給人數等、並依資政殿大學士例施行。

この人事は明堂落成の賞典のかたちで行われた。『續資治通鑑長編紀事本末』卷一二五・政和七年六月

己未、童貫加檢校少傅、威武軍節度使梁師成爲檢校少保、興德軍節度使・宣和殿學士蔡攸爲宣和殿大學士、太中大夫・開封府

(73) 凡外除則換延康、蓋宣和職親地近、非他比。己亥歲改保和殿。梅原氏は該史料について「中貴人官高者皆直宣和殿」を「宦官や高官たちはいずれもそこに侍る」とされている。常識的に考えれば、士大夫に與えられる高級館職が、宦官ポストを基に創られることなど考えられないため、あえて「宦官や高官たち」とされたのだろう。しかしのちに見るように「直宣和殿」が一つの宦官ポストであることは間違いない、やはりここは「中貴人で官位の高い者は皆な直宣和殿であつた」とするのが正しかろう。

(74) 内臣舊有管勾天章閣之類、政和中、擇三十人用事者、改稱直睿思殿・宣和殿、及祇應大御佩魚。

(75) この「長編」の原注には、「按、德芻所云多不實、故具註此、當考。」というコメントが附されており、李燾は「邵獻子」に全幅の信頼を置いていない。ただしその懷疑の矛先は、本引用では省略した部分にある當時の服制の説明に對するものであり、今注目する「直睿思殿・宣和殿」の存在に對する疑義ではない。

(76) 『長編』卷一九一・嘉祐五年十一月辛卯條
(呂) 誨又言「伏聞已前諸閣分內品之類、不過一二十人。比來増及數倍、除身分俸外、更請本閣料錢・四時衣服、又破三司折食價錢、冗費甚多。繇此歷天章閣・後苑・內東門・御藥院最為優厚、或因監都督功作一切小勞、便理績效、得聖旨畫下、則超資職等、謂之閣轉。……伏乞指揮入內侍省檢會諸閣分實元以前人數、比類今日、如員數過多、即行減省。及管勾天章閣・後苑・內東門・御藥院、各限定員數、或與三年一替。」
こで言う「後苑」は後苑造作所のこと。『宋會要』職官三六一七六「後苑造作所」參照。

(77) 『宋會要』職官三六一一三『神宗正史職官志』にも
願進外官、推恩加等、遷至內殿崇班、則寄理資級。押班以上秩高者、加昭宣・宣政・宣慶・景福殿・延福宮使、領刺史至觀察

王革遷三官、宣和殿學士・太中大夫盛章遷兩官、顯謨閣待制蔡條・蔡條並爲龍圖閣直學士、皆以明堂成推賞也。

また最終的な殿閣學士の序列は、『宋史』卷一六八・職官志「元豐以後合班之制」に載っており、以下の通り。

觀文殿大學士、觀文殿學士、資政、保和殿大學士、翰林學士承旨、翰林學士、資政、保和、端明(延康)殿學士、龍圖・天章・寶文・顯謨・徽猷・敷猷閣などの諸閣學士、樞密(述古殿)直學士、諸閣直學士、保和殿待制、諸閣待制。

(69) 『宋會要』帝系八一五七・政和八年三月十六日條
以太師・魯國公蔡京男條爲朝散郎・宣和待制、充駙馬都尉、尙福康帝姬。

同書・帝系八一五八・宣和六年四月十七日條
詔通議大夫・保和殿待制・駙馬都尉・提舉上清寶籙宮蔡條、自除侍從選尙、已六年。可特與保和殿直學士。

(70) 梅原郁『宋代官僚制度研究』(同朋舍出版、一九八五年)第四章「宋代の館職」第四節「最上級の館職」、三九一―三九二頁。

(71) 『宋大詔令集』卷一六四「置宣和殿學士御筆」(政和五年四月二十四日)

宣和祕殿、建自紹聖中、經毀撤廢、更至崇寧初繼復繕完。朕萬幾餘暇、游息須臾之間、未始不居於此。近置直殿、以左右近侍官典領、吾□□□□(士大夫未)有以處之。宜置新班、以彰榮近、以永其傳。可置宣和殿學士、班在延康殿學士之下、以兩制充、聽旨除授。凡厥恩數、並依延康殿學士體例施行。
缺字部分は『宋會要』職官七一一〇・政和五年四月二十四日條にて補う。

(72) 宣和殿、燕殿也、中貴人官高者皆直宣和殿。始置學士命蔡攸、置直學士命蔡條・蔡條、置待制命蔡條。後又置大學士命蔡攸、自盛章・王革・高佑皆相繼爲學士、班秩比延康殿學士爲加優。

(77)

留後止。其要近職任、則彰善閣・延福宮、遷後苑、次龍圖・天章・寶文閣、(内)東門司、御藥院、乃除帶御器械或押班。とあり、要職差遣の順序として、彰善閣・延福宮、後苑、龍圖・天章・寶文閣、内東門司、御藥院、帶御器械、押班の順が示され、上述の四職が含まれる。なお御藥院・内東門司については、友永植「御藥院考」(『別府大學短期大學部紀要』第六號、一九八七年)、同氏「内東門司考」(『史學論叢(別府大學史學研究會)』二一、一九九〇年)参照。

九月二十二日、保靜軍節度觀察留後・提舉龍德宮・直睿思殿楊戩奏「朝廷肇新直殿之職、其繫銜等次序、安敢有議、若止以帶職・非帶職、正任轉官先後爲次、大恐未稱朝廷肇新直殿職任之意。伏望詳酌立法施行。」詔帶直睿思殿人、繫銜序位等、在不帶職人之上。

十二月十八日、中書省言「勘會直睿思殿既繫銜序位在不帶職人之上、合爲貼職立文。其睿思殿供奉、亦當一體立法。文武官勳罷、并參軍等文、竝合改修。今參酌修立到「集賢殿修撰至直祕閣・直睿思殿并睿思殿供奉爲貼職」等條。

(78) 『宋會要』職官三六―二・政和三年九月二十二日條も同文。前掲注(70)梅原書第四章「宋代の館職」第三節「貼職をめぐって」三六七以下参照。

(79) 九月十七日、手詔、天下人材富盛、趨事赴功者甚衆。舊貼職惟直祕閣・直龍圖閣・右文殿修撰、不足以待多士。可增置直徽猷閣・直顯謨閣・直寶文閣・直天章閣・祕閣修撰・集英殿修撰、并舊爲九等。

(80) 例えは『會編』卷一八・宣和五年七月戊午條
起復太尉・武信軍節度使・充上清寶籙宮使・兼神霄玉清萬壽宮副使・直睿思殿・充河東燕山路・兼河北宣撫使譚稹、授起復檢校少保。

(81)

『山右石刻叢編』卷一八「聖母廟謝雨文」

維宣和五年歲次癸卯、五月朔癸丑、初七日己未、起復太尉・武信軍節度使・充上清寶籙宮使・兼神霄玉清萬壽宮副使・直睿思殿・河東燕山府路宣撫使譚稹、謹以清酌庶羞之奠、致祭于顯靈昭濟聖母……。

『宋會要』運歷一一八・政和八年閏九月一日條

承受官・拱衛大夫・廉州防禦使・直睿思殿馮浩、各轉一官。

例えは以下のように見える。『宋大詔令集』卷九四「童貫檢校少保開府儀同三司護國軍節度使制」(政和六年九月二十日)

太尉、武信軍節度使、充中太一宮使、直宣和殿、陝西河東路宣撫使、鴈門郡開國公、食邑四千五百戶、食實封一千三百戶童貫。……可特授檢校少保、充護國軍節度使、開府儀同三司、依前中太一宮使、加食邑五百戶、食實封三百戶、差遣封如故。

趙希辨「讀書附志」卷上「紹熙熙豐政事十卷」

右政和八年十月一日詔云、可以紹熙熙豐政事書布告施行。此即布告之本也。具列詔書于前、而載十一人姓名于後。今詳書之、以見當時之官制云、……檢校少保・護國軍節度使・中太一宮使・直宣和殿・明堂兼在京神霄玉清萬壽宮・提舉通領頒朔布政詳定事臣梁師成。

『會編』卷一七・宣和五年五月

十一日癸亥、太師・劔南東川節度使童貫、依前太師・進封徐豫國公・少傅・鎮海軍節度使・兼侍讀・直保和殿・充上清寶籙宮使・河東河北路安撫使。

『建炎以來繫年要錄』卷一一・建炎元年十二月庚午條

除名勒停人李志道……宣和末、爲檢校少保・慶遠軍節度・體泉觀使・直保和殿。靖康末、坐典炮失職、有旨俟解嚴日遠竄。以上のように、現存する史料においては、「直殿」に關する限り、宣和年間に入つて「直宣和殿」が「直保和殿」にきつちりと殿名

變更がなされている。

また、直睿思殿と直保和殿は同時期に登場している。『閩中金石略』卷八「神霄玉清宮碑」

宣和元年八月十五日奉聖旨立石……

□侍大夫・保康軍承宣使・直睿思殿・同知入内内侍省事・同提點皇城司・充在京神霄玉清萬壽宮提點〔臣〕□
檢校少師・鎮東軍節度使・太一宮使・直保和殿・明堂兼在京神霄玉清萬壽宮提舉・提轄使〔臣〕梁師成立石

漢魏以來、警夜之制不過五鼓、蓋冬夏自酉戌至寅卯、斗杓之建盈縮終不過五辰、故言甲夜至戊夜、或言五更而已。然日入之後、未至甲夜、則又謂之昏刻。至五更已滿、將曉之時、則又有謂之旦至、夜漏不盡刻。國朝文德殿鐘鼓院於夜漏不盡刻、既天未曉、則但撾鼓六通而無更點也、故不知者乃謂禁中有六更。吾頃政和戊戌未得罪時、曾侍祠於宣和殿。深嚴之禁、嘗備聞之。

(83) 『東都事略』卷一〇一・蔡攸傳

徽宗將斥去京、用中書舍人王安中爲御史中丞、使劾京。攸時直宣和殿、通籍禁庭、聞其事、亟入宮請問、爲父扣頭懇請。徽宗乃已、徙安中爲翰林學士。京復安職。

王安中が御史中丞から翰林學士に遷ったのは、政和七年（一一一七）九月丙申（『長編紀事本末』卷三二「蔡京事迹」）で、同書に引く「王安中行狀」にも同じく蔡攸が徽宗に懇請したことが見える。またその時期から史料中の「直宣和殿」はポスト名ではないだろう。蔡攸と直宣和殿との關係は後述。

(84)

朱弁『曲洧舊聞』卷八「陳瑩中爲人所沮不得用」

上自此每欲用之、而朝廷上下皆恐其復用。又曾於宮禁對左右說及瑾宜召之意。時蔡攸亦在側、對曰「瑾得罪宗廟、陛下雖欲用之、如其在天之靈何。」上蹙頰者久之。

(85)

國朝、宰相・執政既罷政事、雖居藩府、恩典皆殺。政和中、始

(86)

置宣和殿大學士、以蔡攸爲之、俸賜・禮秩悉視見任二府。其後踵之者、其弟脩（脩）・其子行、而孟昌齡・王革・高伸亦繼爲之。然皆領宮觀使或開封府・殿中省職事、未嘗居外、及革出鎮大名、仍舊職以行、而恩典悉如在京師。其後蔡靖以資政殿學士知燕山府、久之、亦進是職再任、恩數加之、雖前宰相亦莫及矣。王革が大名尹となったのは宣和四・五年の前後で、蔡靖が燕山府に出たのもそのすぐ後のことである。後掲【表】参照。

(87)

これは程俱が蔡脩のために代筆したものである。
臣脩言、伏蒙聖慈特除臣宣和殿學士者。控辭莫達、難回渙汗之私。申命有嚴、遂拜出綸之賜。恩榮過厚、慙悸靡寧。〔中謝〕
切以殿閣阡分、宣和爲清燕之首。簪紳森拱、學士列內朝之班。規模蓋出於宸心、選置必由於睿鑒。雖二府鈞衡之任、造次莫前。唯萬幾聽斷之餘、於焉居息。靜則娛神而觀妙、動則泛應以曲成。儲精渙澤之先、游意古今之表。司存於此、世論甚榮。既瞻道德於後前、復備聖神之顧問。苟博洽環奇之士、使得親法座之顧問。其論思獻納之官、猶難望清光之彷彿。況如臣者、自愧蔑然。幼懷學禮之心、偶叨上第。居守趨庭之訓、僅比中人。以無庸忠謹之資、當不世便蕃之寵。第深虞於幽黜、曾何補於聖時。積有冒逾、更塵超陟。此蓋皇帝陛下順帝之則、如日之升。曲推善貸之仁、下委容光之照。不鄙行能之無取、灼知心腹之靡他。肇祕殿之新名、躋群髦而首用。置之左右、益示眷知。列戟相望、父子逢辰於千載。義冠入侍、弟兄竝直者四人。實當世之莫儔。豈素懷之敢及。誓殫夙夜、少答生成。臣無任。

(88)

上記のように、蔡脩は自ら「僅かに中人に比す」才をもって宣和殿學士となったと言う。もとより謙遜の詞ではあるが、宣和殿學士の背景を窺わせる言葉である。
『宋會要』職官一一三・宣和四年正月十七日條、同書・職官四一
一一〇・宣和四年四月八日條。

(89) 『宋會要』職官一一・宣和五年五月十一日條。

(90) 徐自明『宋宰輔編年錄』卷一一・宣和五年六月

辛亥、蔡攸領樞密院事。自上清寶錄宮使・兼神霄玉清萬壽宮使・兼侍讀・河東河北宣撫使、落直保和殿、依前少師・安遠軍節度使除。

(91) これに關しては外任に出ることが關係しているかもしれない。記述のように、宣和末に至って王革・蔡靖が地方に居るままで保和殿大學士を與えられているが、宣和四年の段階では地方官が保和殿大學士の稱號を持つことは出来ていなかった。一方で本來は「宣和殿に直す」役目を持つはずの宦官「直宣和殿」は、その稱號を帶びたままで外任が可能であった。他ならぬ童貫が「直宣和殿・陝西河東路宣撫使」となっている（『宋會要』職官四一一・一九・政和六年正月五日條）。蔡攸は宣和四年四月八日に童貫の副官として河北河東路宣撫副使となり外任するが、これに合わせたように同年から「直保和殿」を帶びている。宣和初年における彼の肩書きを明示する史料が無いため、具體的に蔡攸がいつ保和殿大學士を落としたのかは不明であるが、ともかく管見の限り、宦官以外で直保和殿の稱號を帶びるのは蔡攸一人しかない。

(92) 一、自古有國、設官分職、非獨下不得僭上、上亦不得侵下、所以正名分也。公師之官、將相之位、人臣之至貴、天子所尊禮、非百官有司比也。方宣和間、王黼以太宰而行應奉司、蔡攸以三孤而直保和殿、紊亂之事、遂爲禍萌。中興以來、所宜痛革。而頃者遂有以師傳而領殿前都指揮使者、天下固已怪矣。近復有以太尉而領閣門事者、閣門、古之中涓、太尉服章班列、蓋視二府瀆亂名器、莫此爲甚。欲乞聖慈詔輔臣議之、例加訂正、著爲定制、亦革弊所當先也。

(93) 注(70)前掲書、三六〇—三六一頁。

(94) 『閩中金石略』卷八「神霄玉清宮碑」

宣和元年八月十五日奉聖旨立石……

保和殿直學士・朝請大夫・提舉上清寶錄宮・編類御筆・兼禮制局詳議官校正內經同詳定官・賜紫金魚袋臣蔡脩奉聖旨題額。

(95) 『宋會要』方域四—三

政和六年二月十九日、詔、支降御前錢二萬貫、于京師起第一區、賜盛章居住。

(96) 徐度『卻掃編』卷下

王保和革爲開封尹、專尚威猛、凡盜一錢、皆杖脊配流。一日杖於市、欄人中有擲書一冊其旁者、亟取視之、則其卧中物也、因大驚、捕逐竟不得。宣和末、河北盜起、以選出守大名、慘酷彌甚、得盜輒殺之、然盜愈熾。革自以殺人既衆、且懲開封之事、常懼人圖己所居、輒以甲士環繞。然每對客、必焚香、呂本中舍人時從辟爲師屬、私語曰「此止（正）所謂『兵衛森畫戟、宴寢凝清香』（韋應物の「郡齋雨中與諸文士燕集」）者也。」（括弧は引用者）

(97) 保和殿大學士就任は、同書卷上（後掲注(97)）に見える。

この時期の殿中省については、拙稿「宋代の殿中省」（『東方學』一一四、二〇〇七年）参照。

(98) 『卻掃編』卷上

童貫之始入樞府也、官已爲開府儀同三司、而但以爲「權簽書樞密院河北面房公事」、頃之、乃進稱「權領」。蓋以謂所掌止邊防一事且姑使爲之而已。又數月、乃正稱「領樞密院事」、自是不復改。其後蔡攸以少師居樞府、亦稱「領」、鄭太宰居中以故相居樞府、亦稱「領」。宣和間、凡官品已高而下行職事者、皆稱「領」。如蔡行以保和殿大學士領殿中省、高俅以開府儀同三司領殿前司、王革以保和殿大學士領開封尹之類、是也。靖康間、何丞相稟以資政殿學士、李丞相綱以資政殿大學士、皆領開封府職事、而別置尹。初貫之不稱「知」而稱「領」者、非尊之也。

(99)

蓋猶難使之正居執政之位、故創此名。然鄧樞密洵武以少保知院、而實居其下。慶曆間、呂許公以首相兼判樞密院事、論者以爲「判」名太重、未幾、改兼樞密使。元豐官制、廢樞密使不置、則知院爲長官。今「領」居「知」上、則判院之任也。按、漢制有「領尙書」、有「平尙書」。「領尙書」則將軍・大司馬・特進爲之、「平尙書」則光祿大夫・諫大夫之徒皆得爲之、則「領」之爲重也久矣。

なお前注の拙稿では、蔡行に關連して「蔡行敕」に載る「領殿中省事」という官稱に深く注意をしていなかったが、上記の史料から、北宋末のこの時期、單に「殿中監」ではなく「領」を冠することに意味があったことが分かる。

『靖康要錄』卷四・靖康元年四月十五日條「臣僚上言」
方今天下姦惡如織、蕪穢郡縣、戕賊黎元、凡才無爛羊之能、冒寵有續貂之嘆。吏部充塞、無闕以擬注、版曹空匱、不給於祿廩、若不一大鏟革、恐終不可有爲。今以軍興多故、郡縣賞遺、鞭笞良民、無直而糴、上下皆敝、公私甚勞、而姦宄無用之人坐糜倉廩之蓄、此所謂繁其華者傷其實、披其枝者傷其根者也。願詔吏部稽考庶官、凡由楊戩・李彥之公田、王黼・朱勔諸道之應奉、童貫・譚稹等西北之師、孟昌齡父子河防之役、與夫夔蜀湖南之開疆・關陝河東之改幣・吳越山東茶鹽陝田之利・宮觀池苑營繕之功・後苑書藝局文字庫所與之賞、淫朋比德、各從其類。又若近習所引・獻頌所采・效用有力・應奉有勞特赴殿試之流、此皆殃民蠹國・敗俗妨賢、姦宄取位、賕賂買官、所叨恩數、不限高卑、一切褫奪、還其本秩。若非此族而橫竊名器、如橫行節度之貴仕、祕閣延殿之華資、或以童稚奴僕而濫膺、或以商賈胥役而貨取、人人論列、簡牘徒繁、願令吏部各具閥閱、諸臺諫分使看詳、上之朝廷、次第裁抑。其坐公田得罪如鮮于可非理譴逐、宜自元斷月日復其資秩恩數而升擢之、以勸忠諫。然後位著可清、

(100)

賢能可進、生民可安、國用可節。昔唐斜封墨敕官、一日停數千員不以爲疑、今亦何難哉。夫糞土爲牆、匠石不能施塗墍。鄧衛調瑟、后夔難以致蕭韶。『詩』曰「周雖舊邦、其命維新。」願陛下順天休命而一新之也。

『歷代名臣奏議』卷一四一には許翰の言として「翰爲御史中丞上言曰」とされるが、(許翰の文集『襄陵文集』卷五にも「慣用人材疏」として入っているが、「按此首從名臣奏議中補入」と注記がある。)ほぼ同文が『宋會要』選舉二二・一二・靖康元年四月十三日條にもあり、そこでは監察御史胡舜陟の言となっている。

『宋會要』職官七六・三七「收斂放逐官」
高宗建炎元年五月一日敕。……刑部限三日檢舉。惟蔡京・童貫・王黼・朱勔・李邦彥・孟昌齡・梁師成・譚稹及其子孫、皆誤國害民之人、更不收斂。

(101)

また同書・刑法四一四・紹興元年正月一日條の德音でも同じメンバーが「更不移放」となっている。

『宋會要』方域二五・一九・宣和二年八月二十日條
詔……提領措置官・保和殿學士・銀青光祿大夫孟昌齡、興國軍節度使王仍、各轉一官。

(102)

『宋史』卷四七〇・佞幸傳・王黼傳
遭父憂、閏五月、起復宣和殿學士、賜第昭德坊。故門下侍郎許將宅在左、黼父事梁師成、稱爲恩府先生、倚其聲焰、逼許氏奪之、白晝逐將家、道路憤歎。

(103)

彼が賜第を賜ったのは、『宋會要』方域四一・二三では政和六年十一月六日、詔、賜宣和學士王黼昭德坊第宅一區。である。

『宋史』卷三三八・薛向傳附嗣昌傳
嗣昌亦以吏材奮。崇寧中、歷熙河轉運判官、梓州・陝西轉運副使、直龍圖閣・集賢殿修撰、入爲左司郎中、擢徽猷閣待制・陝西都轉運使、知渭州、改慶州。監公使庫皇眞坐獄、嗣昌奏請之、

遂に監臨自盜責安化軍節度副使、安置鄆州。起知相州、復待制・知太原府。論築涇原三倉勞、加顯謨閣直學士。又以撫納西羌功、進延康・宣和殿學士、拜禮部・刑部尙書。坐啓擬反覆罷、提舉崇福宮。久之、遷延康殿學士・知延安府、賜第京師。當選官、丐回授其子昶京秩。

『宋史』卷四五六・孝義傳・申積中傳

政和六年、以奉議郎通判德順軍。翰林學士許光凝嘗守成都、得其事薦諸朝、召赴京師、擢提舉永興軍學事、道卒。光凝復與宣和殿學士薛嗣昌・中書舍人宇文黃中表其操行、詔予一子官。

『宋史』卷三五六・劉昂傳

加宣和殿學士、知河南府、積官金紫光祿大夫。與王栻交通、事敗、開封尹盛章議以死、刑部尙書范致虛爲請、乃長流瓊州。死、年五十七。

劉昂は大晟樂制定に盡力した人物である。村越貴代美『北宋末の詞と雅樂』（慶應義塾大學出版會、二〇〇四年）第二章「大晟府の人々」を参照。

（104）『會編』卷二五・宣和七年十二月二十一日條

三省・樞密院同奉聖旨。宇文虛中命除保和殿大學士・充河北河東宣諭使、其請給・人從依見宰執例施行、不得辭避、日下受告また、のちに宇文虛中は祈請使として二帝返還を實現すべく金に赴いたが、目的は果たせず、彼自身は留まって金に仕えた。この経緯については、前掲注（1）小栗論文、同氏「靖康の變前夜における宇文虛中」（『人文論集（静岡大學人文學部）』二七、一九七六年）、中嶋敏「南宋建炎對金使節について―宇文虛中のことなど―」（『東洋研究』一〇六、一九九三年。のち同氏『東洋史學論集 續編』汲古書院、二〇〇二年）参照。

元符中、監在京裁造院。徽宗時爲端王、每退朝、攸適趨局、遇諸塗、必下馬拱立、王問左右、知爲蔡承旨子、心善之。及即位、

記其人、遂有寵。

（106）同じ話は後掲注（107）『會編』所引『國史後補』にも見えている。しかし有名なこのエピソードも、蔡京・童貫の行動を仔細に追えば、兩者が杭州に同時に居ることはあり得ず、後世の誤った喧傳であった。これについてはすでに『續資治通鑑長編拾補』が示唆している（卷二五・建中靖國元年十二月戊戌條の按語）。また前掲注（6）林論文でもこのエピソードを否定し（九頁）、蔡京は向氏兄弟を通じて向太后に近づくことで身の保全をはかっていたことを指摘する。そしてその後の経筵の中で徽宗の新法政策への志向を窺ったという。いずれにせよ蔡京の徽宗との接觸は、徽宗即位後にはじめてなされたものである。

（107）『會編』卷五六・靖康中帙・靖康元年九月十五日條

『國史後補』曰、伯氏魯公之長子、又所最愛、當元符初官裁造院、上爲端邸時、每退朝出內北門。伯氏適來趨院、必下馬拱立門首、以俟上過而後退。上詢爲何人、左右曰「蔡承旨衙內也」、由是上心善之。其後常以爲言、況憑藉家世、遭逢異寵又如此。假若稍加修飾、則宰相・三公不屬他人矣、亦何必作爲諧嫖、用蕩上心、依恃婦人、破壞骨肉、至違背天性、上孤恩紀。上既睿明、在宮中反笑謂左右「蔡六詎應爲宰相耶。」是徒爲時主所窺。凡所勞心、不亦惜乎。

『鐵園山叢談』卷二

政和初、至尊始踵唐德宗呼陸贄爲「陸九」故事、目伯氏曰「蔡六」。是後兄弟盡蒙用人禮、而以行次呼之。至於嬪嬙宦寺、亦從天子稱之、以爲常也。目仲兄則曰「十哥」、季兄則曰「十一」、吾亦荷上聖呼之爲「十三」。而內人又皆見謂「蔡家讀書底。」嗚呼、無以報稱且奈何。

（108）『清波雜志』卷二

蔡攸副童貫出師北伐。……既行、徽宗語其父京曰「攸辭日奏、

功成後要問朕寬念四・五都、知其英氣如此。」京但謝以小子無狀。二人乃上寵嬪、念四者閭媛也。

〔念四〕「五都」については、『清波雜志校注』（中華書局、一九九四年）で劉永翔氏が考證している。（八二頁）

宮崎市定『水滸傳―虚構のなかの史實―』（中公新書、一九七二年）のち『宮崎市定全集』十二「水滸傳」第II部、岩波書店、一九九二年。中公文庫、一九九三年。

(109) 『宋史』卷四七二・姦臣傳・蔡京附傳

崇寧三年、自鴻臚丞賜進士出身、除祕書郎、以直祕閣・集賢殿修撰、編修國朝會要、二年間至樞密直學士。京再入相、加龍圖閣學士兼侍讀、詳定九域圖志、修六典、提舉上清寶籙宮・祕書省兩街道錄院・禮制局。道・史官僚合百人、多三館雋游、而攸用大臣子領袖其間、懵不知學、士論不與。

(111) 楊萬里『誠齋詩話』（不分卷）

蔡攸幼慧、其叔父下、荆公壻也。下攜攸見公、一日公與客論及『字說』、攸立其膝下、回首問曰「不知相公所解之字、爲復是解蒼頡字、爲復是解李斯字。」公不能答、拊其頂曰「你無良、你無良。」見劉尚書美『中說』。

(112) 陸游『老學庵筆記』卷一〇

蔡攸初以淮康節領相印、徽宗賜曲宴、因語之曰「相公公相子。」蓋是時京爲太師、號公相、攸卽對曰「人主主人翁。」其善爲諧給如此。

(113)

攸歷開府儀同三司・鎮海軍節度使・少保、進見無時、益用事、與王黼得預宮中祕戲、或侍曲宴、則短衫窄袴、塗抹青紅、雜倡優侏儒、多道市井淫嫖譁浪語、以蠱帝心。妻朱氏出入禁掖、子行領殿中監、視執政、寵信傾其父。

『皇朝編年綱目備要』卷二八・宣和元年九月條では妻を「朱氏」とするが、字形が似ることからくる單なる字の誤りであらう。

ここにある「視執政」は、『宋史』卷一六九・職官志「敘遷之制」に行・守・試の三等を説明したのち、「宣和以後、官高而仍舊職者謂之領、官卑而職高者謂之視、故有庶官視從官、從官視執政、執政視宰相。」とあるように、北宋末のこの時期、官階が低い状態で上級の職務をこなす「視官」の制があり、「視執政」は蔡攸が官位が低い状態のまま、執政の職務をこなしていたことを指しているであろう。視官については龔延明『宋代官制辭典』六六八頁を、「領」については前掲注(98)を参照。

(114)

宋代における禁中出入の嚴については、岳珂が漢時宮禁與外間無大別異、……國朝家法最爲嚴備、羣臣雖肺腑、無得進見禁者。『愧郈錄』卷一二「宮禁進見」と述べ、哲宗朝の呂大防も

禁中事、雖從官亦無緣知。〔宋會要〕職官三六・一九・元祐八年十一月一八日條

と言う。そもそも第一章で見たように、當時の蔡京にとっても禁中の宣和殿は未見の地であり、だからこそ曲宴の時を利用して見學を行い、それを文章として世に喧傳したのであるから、やはり一般人士は簡單には入れぬ場所であつたに違いない。

(115)

蔡京父子在京城之西兩坊對賜甲第四區、極天下土木之工。一日太師第、乃京之自居也。二曰樞密第、乃攸之居也。三曰駙馬第、乃條之居也。四曰殿監第、乃攸子之居也。攸妻劉、乃明達・明節之族、有寵、而二劉不能容、乃出嫁攸、權寵之盛亞之。

いま『朱子語類』は中華書局・理學叢書本（一九八六年）に従う。朝鮮抄本の徽州本『朱子語類』では、「攸妻劉」「出嫁攸」の二箇所の「攸」字が缺字となっている（中文出版社一九八二年景印本、卷一三九・作文二・本朝）。『朱子語類』の諸版本については、岡田武彦『朱子語類の成立とその版本』（中國思想における理想と現實）木耳社、一九八三年）参照。

(116)

二人のうち明節皇后は、第一章で登場した、當時最も寵愛を受けていたあの「劉安妃」である。明節皇后は劉安妃より以前に寵愛を受けていた人物で、両者に實際の血縁関係はなかったが、姓が同じだった点により明達が明節を養女にしていたという（『宋史』卷二四三・后妃傳）。

(117)

前掲注(21)引用史料。また、この場面は陶宗儀『說郛』卷一九下所引の謝枋得『碧湖雜記』にも見えてくる。

(118)

宣政間、禁中有保和殿。殿西南廡有玉真軒、軒內有玉華閣、即安妃妝閣也。妃姓劉、進位貴妃、林靈素以左道得幸、謂徽宗爲長生之帝君、妃爲九華玉真安妃。每神降、必別置妃位、畫妃像于其中。每祀妃像、妃方寢而覺有酒容。群臣蔡元長最承恩遇、賦詩殿壁云「瓊瑤錯落密成林、松竹交加午有陰。恩許塵凡時縱步、不知身在五雲深。」侍宴于保和殿、令妃見京、帝先有詩曰「雅興酒酣添逸興、玉真軒內見安妃。」命京廣補成篇、京即題曰「保和新殿麗秋暉、恩許塵凡到綺闌。」云云、須臾、命京入軒、但見妃像、京又有詩云「玉真軒內暖如春、只見丹青未見人。月裏嫦娥終有恨、鑑中姑射未應眞。」已而至閣、妃出見京勸酬至再、日暮而退。

(119)

『會編』卷六・宣和四年五月九日條所引『北征紀實』
童貫以四月十日行、而攸以五月九日降旨、十一日敕出、十三日拜命。攸辭免如常禮。批答云「朕以童貫宣撫北道、獨帥重兵、其頭領將佐及四路守臣・監司、竝其門人故舊、貫以昏髦、所施爲乖謬、故相隱匿、蔽不以聞、致邊事機會差失、爲朝廷之害、莫大於此。卿朕所倚靠、無出右者、所以輟卿爲副、實監軍爾、如軍旅之事、卿何預焉。只專任民事、及監察貫之所爲可。只今受命、擇十八日出門進發。」

(120)

『會編』卷一一・宣和四年十一月二七日條
初童貫行、上遣內侍李某、微服於貫軍中、探其去就。燕京既失、州縣復陷、人民奔竄、內侍當密奏之、上以手札責貫曰「今而後、不復信汝矣。」

同書卷一二・宣和四年十二月十一日條所引『北征紀實』

先是、上命小璫主郵事、不隸宣司、戒之曰「得燕山、爾自遣馳報。」而貫亦自作牌、大書曰「克平燕山路」以伺、皆謂唾手可得。及藥師・可世入燕山城、是日報至、貫匿之。中夜始約伯氏、同奏奏以牌等、即馳上捷、纔二日半至闕下、然遲小璫猶半時許。結果的にこの宣撫司時代に兩者の協力關係が成立し、後述するように蔡攸が領樞密院事となつて講議司を牛耳つた際には、童貫を引き立てている。ただしそれをもつて初めからの協力關係を想定することは正しくない。

(122)

宦官を利用した地方監察はこの時に限らず、徽宗朝になつて強化されていた。『卻掃編』卷中

祖宗時、諸路帥司、皆有走馬承受公事二員、一使臣、一宦者、屬官也。每季得奏事京師軍旅之外、他無所預。徽宗朝、易名廉訪使者、仍俾與監司序官、凡耳目所及、皆以聞。於是與帥臣抗禮而脅制州縣無所不至、于時頗患苦之。宣和中、先公守北門、有王褒者、宦官也。來爲廉訪使者、在輩流中、每以公廉自喜、且言素仰先公之名德、極相親事。會入奏回傳、宣撫問畢、因言比具以公治行奏聞。上意甚悅、行召還矣。先公退語諸子、意甚耻之、故謝表有曰「老若李鄴、久自安於外鎮、才非蕭傳、敢雅意於本朝長兄惇義之文、蓋具著先公之意也。」《唐書》李鄴傳、爲淮南節度使、先是、吐突承璀爲監軍、貴寵甚、鄴以剛嚴治、相禮憚、稍厚善。承璀歸數稱薦之、召拜門下侍郎・同平章事。鄴不喜由宦倖進、及出祖樂、作泣下謂諸將曰「吾老安外鎮、宰相豈吾任乎。」至京師不肯視事、引疾固辭、改戶部尚書。」

(123) 『宋史』卷二二・徽宗本紀・宣和五年七月「己未、童貫致仕。」

(124) 前掲注(107)の『會編』で「どうして蔡六(攸)が宰相となれるものか。」という徽宗の言葉はこのときに發せられたものであろう。そこには蔡攸を非難する意味合いは窺えず、兄が弟を、先輩が後輩を揶揄するような感じを受ける。

また朱熹はこの時蔡攸が英國公・燕國公に封じられたというのが、他の史料には見えない。『朱子語類』卷一三〇・本朝四

蔡攸、字居安、京長子也。王師入燕、以功進少師、領樞密院事、封英國公・燕國公。後欲相之、既而悔之、但進太保。

(125) 徽祖將內禪、既下哀痛之詔、以告字內、改過不吝、發於至誠。

前一夕、即玉虛殿常奉眞馭之所、百拜密請、祈以身壽社稷。夜漏五徹、焚詞其間、嬪嬙巨璫、但聞謁禱聲、而莫知其所以然。

明日、遂御玉華閣、召宰執、書「傳位東宮」四字、以付蔡攸。又一日、欽宗遂即位、實宣和七年十一月辛酉也。

(126) 『東都事略』卷一〇一・蔡攸傳

及將謀內禪、親書「傳位東宮」字以授邦彥、邦彥卻立不敢承。時中輩在側、徽宗躊躇、以付攸。攸退、屬其客給事中吳敏、敏即約李綱共爲之、議遂定。

『朱子語類』卷一三〇・本朝四にも同内容の記事あり。

(127) 『宋會要』崇儒六・一七・紹興十一年六月二十四日條に

詔萬安軍於蔡攸家收取徽宗皇帝御筆立皇太子詔。敘宣和末策立淵聖皇帝事、因及罪已奏天。密表投進、宣付史館、實錄院編類、送敷文閣藏之。從古陽軍使楊雅請也。

とあり、淵聖皇帝(欽宗)を策立する宣和末の禪讓の詔は、紹興年間まで蔡攸家に藏されていたと見られる。また蔡攸と吳敏との結託を効するのは、『靖康要錄』(十萬卷樓叢書本)卷一〇・靖康元年九月五日條「臣僚上言」

伏覲道君太上皇帝、去冬銳然以大位內禪于陛下、不謀宮闈、不

聞闈宦、不詢郡臣、使神器永有依歸、其賢於唐太宗遠矣。蔡攸出入密侍、聞上皇倦勤之意甚久、奸人多慮、用心不臧、不肯宣

露者、將有所待。一旦上皇除陛下爲開封牧、攸知事勢已定、又自度父子稔惡、平時內憚陛下剛明、遂授其語于吳敏、俾之建白。

攸又贊除敏爲門下侍郎、其慮患深矣。敏不自揆、乃攘爲己功、羣小交口稱道爲有定策之勳、茲實駭聞。內禪出上皇之意、雖百

吳敏、何能爲哉。敏既貪天功以爲己力、又德蔡攸所授之語、惟思報蔡氏之恩、畧不顧君臣大義、雖交章攻京・攸之罪、而敏橫

身障蔽、斥逐臺諫、招引同門、以爲其助。

また『朱子語類』卷一二七・本朝・徽宗朝には
宣和內禪、惟有吳敏有『中橋居士記錄』、說得最詳。

という。

(128) 『建炎以來繫年要錄』卷一五一・紹興一四年四月

丁亥、秦桧奏乞禁野史。上曰「此尤爲害事、如靖康以來私記、極不足信。上皇有帝堯之心、禪位淵聖、實出神斷、而一時私傳

以爲事由蔡攸・吳敏。上皇曾論宰執謂『當時若非朕意、誰敢建言。』必有族滅之禍。」樓炤曰「上皇聖論亦嘗報行、天下所共知也。」

(129) 『宋史』卷三五一・吳敏傳

大觀二年、辟雍私試首選。蔡京喜其文、欲妻以女、敏辭。

『靖康要錄』卷九・靖康元年七月十三日條「御史中丞陳過廷言」

臣謹按少宰吳敏不才而喜爲奸、無識而好任數。又其天資險佞、籋籊威施、面若畏人、退而害物。自童幼時爲蔡京父子養於門下、

側媚狎昵、日益親附。方鄭居中作相、與京構隙、京乃峻擢敏輩、列於侍從、分布親黨、四面刺探、當時被其中傷者不可勝計。奸

迹既彰、久被棄斥。前年攸及子條覆出爲惡、首加薦引。敏知京・條將敗、而攸及李邦彥齊驅竝進、於是又背京而從攸。夷考

其行、豈宜實諸廟堂、以汙宰輔之任。伏自上皇禪位、陛下登極

之初、授受指遜、若唐堯・虞舜、初無間言、乃貪天之功以爲己力、每於章疏、喋喋自明、此敏之罪一也。

(130) 李綱『靖康傳信錄』卷上に見える禪讓關連の諸記事を参照。このとき太子による監國で済まそうとする吳敏に對し、李綱は讓位でなければ事態を打開できないと言ったという。

(131) 『會編』卷五六・靖康中帙・靖康元年九月十五日條「又上言」
臣竊觀李綱劄子稱「上皇厭萬機之煩、欲授聖子、意未有發、臣與少宰吳敏力建大策贊成內禪。」臣伏觀、上皇以神器授陛下、蓋知天命人心有所歸屬、奮然獨斷。豈假人謀、此帝堯盛德之事也。當時蔡攸出入禁中、刺得密旨、報吳敏・李綱、欲使二人進用、爲己肘腋。吳敏時權直學士院、身在翰林院、故其議先達。綱爲太常少卿、疎外無由以進、而綱遂懷此劄子、諸路示士大夫、人無不見之所論三事、內禪乃其一也。」

(132) 『靖康要錄』卷一一・靖康元年十月一日「又臣僚上言」
所謂大臣者、以身任社稷之安危、倘輕動妄作、懷私誤國、豈逃重譴哉。伏見李綱本以凡才、誤膺器使、卵翼于蔡氏之門、傾心死黨。逮上皇將有內禪之意、攸先刺探、引綱爲援、使冒策立之功、而綱之罪狀有不可掩者、臣請爲陛下數之。太上皇帝心存道輿、倦聽萬幾、陛下以天子授天寶位、臣下何預焉、乃敢貪天之功以爲己力、此其罪一也。

(133) 莊綽『難肋編』卷中
金人南牧、上皇遜位、乃與蔡攸一二近侍、微服乘花綱小舟東下、人皆莫知。

張知甫『張氏可書』(不分卷)
道君既遜位、乘輿輿出東水門。自稅一舟、得一草簑回脚糧船、與舟人約價、登舟、見賣蒸餅者、於篋中取金錢十文市一枚以食。少頃、童貫・蔡攸等數人者單騎俱至、道君曰「卿等尙來相逐何耶。」攸等奏云「臣等受陛下重恩、死亦不離陛下。」

(134) 當時淮南から江南に逃れた徽宗は、金軍が開封から撤退したのも江南からの開封への物資の輸送停止命令を解かず、開封朝廷との間に鋭い對立をもたらしかねない状況であった。また開封では、徽宗が蜀に幸して獨立するのではないか、という風聞がまことしやかに流れていたという(李綱『靖康傳信錄』卷中など)。

李光『莊簡集』卷八「乞奉迎上皇劄子」
臣聞、唐明皇避寇幸蜀、肅宗即位靈武、及二京平、李泌爲羣臣通奏、具言天子思戀晨昏、請促還以就孝養。若泌者、可謂善處人父子之間矣。恭惟陛下天性仁孝、伏自上皇東幸暴露、日夜憂思、至避殿減膳、不遑寧處、羣臣士庶莫不知之。而軍興之際、朝廷多事、道路隔絕、臣恐陛下至意未能感通、而姦邪之人易成間隙、以上貽宗廟之憂、下爲羣臣之禍。治亂之原、安危之機、盡在於是。臣愚伏望陛下親降詔旨、令三省・樞密院集兩省臺諫官合議奉迎上皇典禮、使陛下大孝之美純粹光顯、過於未登大位之時、實天下幸甚。取進止。

(135) などもこれを示唆する。徽宗と欽宗との微妙な父子關係については張邦煒「靖康內訌解析」(『四川師範大學學報』二〇〇一—三、のち同氏「宋代婚姻家族史論」人民出版社、二〇〇三年)参照。
始上皇留鎮江未返、幸臣寧遠軍節度使吳玠勸上皇幸其里第、朝廷憂之。少宰吳敏請令蔡攸勸上皇北歸以贖罪。四月己亥、上皇還京師。

(136) 『東都事略』卷一〇一・蔡京傳附攸傳も
靖康元年、攸從徽宗南下、言者或云將遂復辟於鎮江。(吳)敏爲言、乞令陪扈還京師、以功贖過。

(137) このとき實際に使者として開封から派遣されたのは宋煥(あるいは暎)で、のちにこの斡旋の勢を喜んだ徽宗から感謝の意を表した御筆を賜っている。その宋煥は蔡攸の妻・宋氏一族であった。

『會編』卷四三・靖康元年三月十五日條

緣此三事、奸人乘間造言、緣飾形似、遂致朝廷之疑。每見臺簡名敕州縣、而實及子躬、興言及此、不覺流涕。比緣嗣聖遣宋暎齋書至行宮、遂得通父子之情、話言委曲、坦然明白、由是兩宮釋然、胸中無有芥蒂。重惟宗廟再安、雖賴大臣翊贊之助、至若使父子之間歡然略無纖毫疑者、暎竭力爲多也。傳言「求忠臣於孝子之門」。若張仲在周、而宣王有成功、信孝子錫類之效矣。

暎周旋兩宮、庶幾古人有足稱者、因書其事、以賜宋暎。

李綱『梁谿集』卷一六一「道君太上皇帝賜宋暎御書跋尾」

方靖康丙午春、臣備位樞廷、被旨奉迎道君於南都。時徽猷閣待制・淮南・江浙・荆湖制置發運使宋暎、適自淮甸召還入對、又奉淵聖御書如行宮、邂逅相見甚款、聽其言蓋惓惓有意於兩宮者。及紹興丙辰夏、臣承乏江西帥事、復與暎會於豫章、暎出示道君御書、所以褒獎之者甚厚、翰墨如新。伏讀相與流涕、乃知前日之言、信不誣也。

ちなみに開封に戻った徽宗は、そのまま龍德宮に入り、結局隠棲を餘儀なくされた。扈從していた蔡攸に對しては、その入京に關してですら反對する世論が強く（例えば『莊簡集』卷九「奏議論蔡攸欲潛入都城筍子」など）、徽宗歸還を果たして贖罪したはずも結局は貶降され、最後は海南島まで流された挙げ句、死を賜った。その最期は、

同時蔡攸・脩亦賜死。脩聞命曰「誤國如此、死有餘辜、又何憾焉。」乃飲藥。而攸猶豫不能決、左右授以繩、攸乃自縊而死。

（周輝『清波雜志』卷二）

とあって、往生際が悪かったと伝えられている。

(138) 前掲注(97)拙論。

(139) 前掲注(50)論文。

(140) 寺地遵「五代北宋政治史概説」今堀誠二編『中國へのアプローチ

(141)

―その歴史的展開― 勁草書房、一九八三年。
熊本崇「宋神宗官制改革試論その職事官をめぐる」『東北大學東洋史論集』一〇、二〇〇五年。神宗は親政期になって、王安石が作った宰相に權力が集中する仕組みを改變し、中書檢正官による司農寺との結びつきを排除し、御史臺による司農寺支配を形成することで、政權の監察と皇帝權の強化を行った（同氏「元豐の御史―宋神宗親政考」『集刊東洋學』六三、一九九〇年）。ただし神宗朝以後、宰執集團における體系は三省共同進呈の導入や、宰相が持っていた案件の專決・專達權の執政への一部移譲とその後の回收など、元祐・元符期を通じて改變が加えられていったという。同氏「宋元祐三省攷―「調停」と聚議をめぐる」『東北大學東洋史論集』九、二〇〇三年）參照。

(142)

『靖康要錄』卷五・靖康元年四月二十九日

御史中丞陳過庭言、罪惡之著、莫甚蔡攸。當京擅權專政、彼則以陰謀詭計出入宮禁、外示異同、中實附會。及童貫興師召亂、彼又副之、出構邊隙、歸罪重賞。以襦袴之資而當大位、以斗筲之器而握重兵、蠹國害民、亞於京・貫、竄殛之罰、不可以免。

(143)

南宋における保和殿館職も含めた殿閣學士の序列は、『宋史』卷一六八・職官志「紹興以後合班之制」や『慶元條法事類』卷四「職制令」に載る。また同書同卷に載る「官品令」では、觀文殿大學士は從二品、觀文殿學士・資政・保和殿大學士・翰林學士承旨・翰林學士・資政・保和・端明殿學士・龍圖・天章・寶文・顯謨・徽猷・敷文・煥章・華文閣など諸閣學士・樞密直學士は正三品、諸閣直學士は從三品、保和殿待制・諸閣待制は從四品となっている。

本稿の作成に際して、岩井茂樹・古松崇志兩先生には多くのご指導を賜った。特に記して感謝申し上げる。

【表】 宣和殿（保和殿）學士職に就任した人物の主な官歴（官・差遣・職は區別せず）

氏名	時 期	主 な 官 歴	出 典
① 蔡攸		通直郎・鴻臚寺丞 → 賜進士出身	宋史本傳
	崇寧3.1.19	祕書省祕書郎	選舉9-14
	～崇寧5	直祕閣 → 集賢殿修撰 → 編修國朝會要 → 樞密直學士	宋史本傳
	政和3.8.28 政和4.4.14 政和4.5.9	龍圖閣學士・提舉醴泉觀・兼侍讀・編修國朝會 要・詳定九域圖志・充編類御筆・禮制局詳議官	禮34-14 職官18-15 禮2-36
	政和5.4	宣和殿學士	萍洲可談1
	政和5.8.15	宣和殿學士・討論指畫制度	禮24-70
	政和6.6.12	宣和殿學士・禮制局詳議官	禮14-67
	政和7.5.4	宣和殿學士・提舉祕書省	職官18-19
	政和7.6	宣和殿學士・朝議大夫	禮24-77
	政和7.6.2	宣和殿大學士	職官7-10
	政和8.9.20 政和8.閏9.1	宣和殿大學士・中奉大夫・上清寶籙宮使・兼神 霄玉清萬壽宮副使・兼侍讀	樂4-1 運歷1-18
	政和末	提舉大晟府	宋史樂志
	宣和1.3.19 宣和1.9.1	宣和殿大學士・淮康軍節度使	樂4-2 崇儒6-11
	宣和4.1.7	淮康軍節度使・開府儀同三司 → 少保・鎮海軍節度使・開府儀同三司・直 保和殿	禮34-18 職官1-3
	宣和4.4.8	少保・鎮海軍節度使・開府儀同三司・河北河東 宣撫副使	職官41-20
	宣和4.12.18	少傅・鎮海軍節度使・河北河東路宣撫司・判燕 山府	職官1-3
	宣和5.5.11	少傅・鎮海軍節度使・兼侍讀・直保和殿・河北 河東路宣撫（副）使 → 少師・安遠軍節度使	
	宣和5.6	少師・安遠軍節度使・領樞密院事	宰輔表
	宣和6.9	落節鉞・少師	
	宣和7.6.19 宣和7.7.4	少師・領樞密院事 → 太師（太保？）・領樞密院事	職官1-3 禮28-86
	靖康1.2.18	太中大夫・提舉亳州明道宮	職官69-20
	靖康1.4.29	節度副使・永州安置	職官69-24
	靖康1.10	潯州安置 → 雷州安置 → 萬安軍安置 → 誅死	繫年要錄1

② 蔡 條		恩澤 → 親衛郎 → 祕書丞	宋史本傳
	政和5.8.15	顯謨閣待制・參詳明堂使	禮24-70
	政和7.6	龍圖閣直學士	禮24-77
	宣和中	禮部尚書兼侍讀・提舉禮泉觀	北山小集20
	宣和1.8	宣和殿直學士	萍洲可談1
	宣和末	知鎮江府	宋史本傳
	靖康1.5.1	潭州安置	職官69-24
	靖康1.7.21	責授昭信軍節度副使	職官69-25
③ 蔡 儵	?	宣和殿直學士	萍洲可談1
	崇寧5?	太常少卿	宋史・陳禾傳
	政和5.8.15	顯謨閣待制・參詳明堂使	禮24-70
	政和7.6	龍圖閣直學士	禮24-77
④ 蔡 條	?	宣和殿待制	萍洲可談1
	宣和5.10	徽猷閣待制 → 落職勒停	能改齋漫錄12
	宣和6.1	朝奉郎・提舉明道宮	紀事本末131
	宣和7.3.29	龍圖閣直學士・朝奉郎・提舉上清寶籙宮・侍讀 → 賜進士出身	十朝綱要 選舉9-16
	宣和7.4.6	毀出身敕・罷侍讀・提舉亳州明道宮	職官69-17
⑤ 盛 章	?	宣和殿學士	萍洲可談1
	大觀2.3	奉議郎 → 兩浙路提點刑獄	會稽續志
	大觀2.8	兼行常平事	北山小集19
	大觀2.10.8	兵部員外郎	會稽續志
	大觀3.9.20	吏部員外郎	職官55-38
	大觀3?~	京畿路轉運副使	宋史本傳
	政和1.9.2 政和3.2.22	集賢殿修撰・知蘇州	選舉33-26 瑞異1-21
	政和3.閏4	知真定府	宋史本傳
	政和3.12	知平江府 → 樞密直學士	姑蘇志
	政和5.3	開封尹	刑法4-87
	政和7.6	太中大夫・開封尹 → 顯謨閣待制	禮24-77
	政和8.7.4 重和1.12.15	開封尹	禮5-5 刑法2-73
	宣和1.7.18	宣奉大夫・提舉南京鴻慶宮 → 單州團練副使・筠州安置	職官69-3

	宣和5?～	知京兆府・提舉江州太平觀	宋史本傳
	靖康1.8.28	單州團練副使・萬州安置	職官69-27
⑥ 王 革	?	保和殿大學士	却掃編中・下
	崇寧4.8.18 大觀3.10.7	度支員外郎	職官51-9 方域13-23
	政和2.5.27 ～政和4?	朝散郎・司農卿 → 集賢殿修撰・河東路轉運使	宋史本傳
		直龍圖閣	選舉33-27
		大理卿	給事集2
	政和3 政和7.2.3	戸部侍郎 → 開封尹	忠惠集2 刑法4-89
	政和7.6	太中大夫・開封尹 → 遷三官	禮24-77
	宣和1.5.15	戸部尙書・降兩官	職官69-3
	宣和1.10.3	刑部尙書	刑法1-31
	宣和3.4.5	起復正奉大夫・延康殿學士・知河南尹	職官77-12
	宣和4.2.4 宣和4.5.30	起復光祿大夫・行開封尹	職官63-10 禮61-7
	宣和5.8.29	大名尹 → 延康殿學士・提舉西京嵩山崇福宮	職官69-13
	紹興4.2.25	左金紫光祿大夫・充龍圖閣待制・提舉華州雲臺觀	儀制13-10
⑦ 高 佑	?	宣和殿學士	却掃編中
	官歷不明		
⑧ 蔡 行	?	宣和殿大學士	却掃編中
	重和1.12.13 宣和6.4.7	領殿中省事	刑法1-30 崇儒4-12
	宣和6.5.20	通議大夫・守殿中監・兼校正御殿前文籍 → 賜進士出身	選舉9-16
	靖康1.4.8	通議大夫・提舉杭州洞霄宮 → 責授昭化軍節度副使・襄陽府安置	職官69-23
	靖康1.5.1	洪州安置	職官69-24
⑨ 孟 昌 齡	政和2.10.4	朝請大夫・行都水監丞 → 中散大夫・行將作少監	方域16-32
	政和4.11.2	都水使者	方域13-25
	政和5.7 政和5.11.17	工部侍郎	河渠志 方域13-25

	政和6閏1.26 政和6.6.5	戸部侍郎	職官54-29 刑法1-29
	政和6.6	戸部尙書・兼詳定一司敕令	崇儒3-11
	宣和1.6.7	兵部尙書 → 依舊延康殿學士・提舉上清寶籙宮・提舉三山河橋	職官69-3
	宣和2.8.20	保和殿學士・銀青光祿大夫	方域15-29
	靖康1.2.18	落職・在外宮觀	職官69-20
⑩ 高 伸	?	宣和殿學士	却掃編中
		殿中監（政和1、職官4）	宋史本傳
		その他の官歴不明	
⑪ 蔡 靖	政和3	禮部侍郎	仲惠集3
	政和4.9.15	左司員外郎	崇儒2-24
	政和5.2.14	中書舍人 → 太子詹事	職官7-24
	宣和5.9.6	知河間府 → 同知燕山府	北盟會編18
	宣和7.11.28	同知燕山府・保和殿大學士	北盟會編23
⑫ 蔡 條	政和8.3.16	朝散郎・宣和殿待制・駙馬都尉	帝系8-57
	重和2.1.10	中大夫	
	宣和6.4.17	通議大夫・保和殿待制・駙馬都尉・提舉上清寶籙宮 → 保和殿直學士	帝系8-58
	靖康1.2.29	深州防禦使	
	靖康1.7.21	勒停	
⑬ 王 黼		校書郎→符寶郎・左司諫→左諫議大夫→給事中	宋史本傳
	政和3.1.17	御史中丞	職官56-39
	政和4.4.14	翰林學士・朝散郎・知制誥・兼侍讀	儀制10-18
	政和4.5	翰林學士 → 戸部尙書	宋史全文14
	政和5.1.6	戸部尙書・侍讀	選舉1-14
	政和5.2.2	翰林學士・侍讀	選舉4-9
		翰林學士承旨・朝請郎・知制誥 (丁父憂)	宋史本傳
	政和6.10.4	起復宣和殿學士・提舉寶籙宮	職官77-8
	政和7.3.22	起復宣和殿學士・提舉寶籙宮・兼侍講・修國史	
	重和1.1	尙書左丞	宰輔表
	重和1.9	中書侍郎	
	宣和1.1	通議大夫・中書侍郎 → 特進・少宰兼中書侍郎・神霄玉清萬壽宮使	宋史本傳

	宣和2.11.13	少保・太宰兼門下侍郎	職官1-3
	宣和3.9.5	少傅・太宰兼門下侍郎	
	宣和4.6.19	少師・太宰兼門下侍郎・榮國公	
	宣和5.5.9	少師・太宰兼門下侍郎・慶國公 →太傅・太宰兼門下侍郎・楚國公	
	宣和6.11	太傅・楚國公致仕	宰輔表
	靖康1.1.3	責授崇信軍節度副使・永州安置	職官69-20
⑭ 薛嗣昌	?	宣和殿學士	宋史本傳
	政和2.10.4	朝請大夫・行都水監丞 → 中散大夫・行將作少監	方域16-32
	政和4.11.2	都水使者	方域13-25
	政和5.7 政和5.11.17	工部侍郎	河渠志 方域13-25
	政和6閏1.26 政和6.6.5	戸部侍郎	職官54-29 刑法1-29
	政和6.6	戸部尙書・兼詳定一司敕令	崇儒3-11
	政和7.1.1	戸部尙書	職官57-58
	宣和1.6.7	兵部尙書 → 依舊延康殿學士・提舉上清寶籙宮・提舉三山河橋	職官69-3
⑮ 劉昂（初名は炳）	元符末	進士	宋史本傳
		太學博士 → 校書郎 → 大司樂 → 起居郎 → 殿中少監	
	大觀1	中書舍人	摘文堂集4
		給事中 → 領議禮局 → 翰林學士 → 工部尙書 → 提舉紀元曆	宋史本傳
	大觀2.6.28	顯謨閣直學士・知陳州	職官68-16
	政和3.2.16	落職免官→戸部尙書	職官27-21
	政和5.2.14	翰林學士→太子賓客	職官7-24
	政和5.5.18 宣和6.6.8	戸部尙書	食貨56-35 食貨43-12
		宣和殿學士 → 知河南府 → 金紫光祿大夫 → 流瓊州	宋史本傳
⑯ 宇文虛	大觀3年	進士	宋史本傳
		起居舍人 → 國史編修官	
	政和6.閏1.22	同知貢舉	選舉1-14
	政和6.6.29	中書舍人	禮39-10

中 (初 名 は 黄 中)	政和8.8.13	提舉鳳翔府上清太平宮	職官68-41
	宣和4.3	中書舍人	紀事本末53
	宣和5	宣撫司參議官	宋史本傳
	宣和5.6.9	集英殿修撰	北盟會編18
	宣和7.12.22	保和殿大學士・河北河東宣諭使	北盟會編25
	靖康1.2	保和殿大學士 → 資政殿大學士・簽書樞密院事	宰輔表
	靖康1.3	資政殿大學士・中大夫・知青州	
	建炎1.5	韶州安置・承議郎・提舉亳州明道宮	繫年要錄5
	建炎2.2.8	責授安遠軍節度使・韶州安置 → 大中大夫	繫年要錄13
	建炎2.5.13	資政殿大學士・提舉萬壽觀・祈請使 → 以後、金に出仕	繫年要錄15

※出典の「宰輔表」「河渠志」は『宋史』を指す。「運歴」「選舉」「禮」「職官」「瑞異」「刑法」「崇儒」「方域」「儀制」「帝系」「食貨」は『宋會要輯稿』の各項目を指す。

Xuanhedian 宣和殿 in the last decade of
the Northern Song:
The Emperor Huizong 徽宗 and Xuanhedian Xueshi
宣和殿學士 Cai You 蔡攸

Takeshi FUJIMOTO

Xuanhedian, the palace founded during the reign of the Emperor Huizong of the Northern Song Dynasty, is famous as the emperor's treasure house. The catalogues of its treasures include the *Xuanhe Bogu Tu* 宣和博古圖, the *Xuanhe ShuPu* 宣和書譜, and the *Xuanhe HuaPu* 宣和畫譜. Besides as a treasure house, Xuanhedian was also a library. In addition, there was a special room for Liu AnFei 劉安妃, who won the favor of the Emperor at that time. It seems that Xuanhedian had been Huizong's favorite place, and indeed he did spend most of his daily life there.

Because of the Emperor, the political position of Xuanhedian became very important. The Imperial Edicts from the Emperor Himself 御筆手詔, which played important roles in the reign of the Emperor Huizong, were issued at East Hall 東廊 of Xuanhedian. Those who engaged in issuing the edicts were eunuchs, with the title of Zhi Xuanhedian 直宣和殿 or Zhi Baohedian 直保和殿, and lower-ranking military officials, with the title of Ruisidian Wenzhi Waiku 睿思殿文字外庫. They all connected to the Xuanhedian in certain way.

The position of Xuanhedian Xueshi 宣和殿學士 was founded in 1115, and at that time Cai You 蔡攸, a son of Cai Jing 蔡京, was appointed as Xuanhedian Xueshi. Those as Xuanhedian Xueshi had no particular jobs, but were allowed to enter the Forbidden Palace 禁中 and accompany the Emperor. For many years Cai You was the only one who owned this position, so I believe the position of Xuanhedian Xueshi was originally established for him.

Cai You had enjoyed Huizong's favor before Huizong's enthronement. Modern scholarship haven't paid too much attention to him, as they regarded him only as Cai Jing's son. Yet since Cai You's relationship with Huizong was closer than Cai Jing, I assume that Cai Jing's power was possibly established upon the relationship

between Huizong and Cai You. That's because Cai Jing as Prime Minister could not enter the Forbidden Palace and participate in issuing the Imperial Edicts from the Emperor Himself, but Cai You as Xuanhedian Xueshi could. Cai You was one of the most influential officials in the last decade of the Northern Song. When we study the political history during Huizong's reign, we have to pay more attention to the political role of Xuanhedian as well as of Cai You.

The Tōhō Gakuhō Journal of Oriental Studies (Kyoto) No. 81 (2007) 69 ~ 135

From Water-side Bandits to “*Japanese Pirates*”: Another Pre-History of the *Jiajing Wokou* 嘉靖倭寇

Takeshi YAMASAKI

It is well known that the “*Japanese pirates*” during Ming dynasty, the *Wokou* 倭寇, included not only Japanese, but even larger numbers of Chinese, who resided along the southeast coast of China. It is also widely believed in Japan as well as in China that the piracy represented a righteous protest against the prohibition against overseas trade, *haijin* 海禁. However, the violent plunder and massacres should not be explained as the principled stand of sea-traders, most of whom were only interested in the profits to be gained through smuggling, which was possible through cooperation with local Chinese governments rather than waging devastating campaigns against them.

The origins of “Japanese Piracy of the Jiajing period” (*Jiajing Wokou*) must be sought in local traditions of collective violence. The *Jiajing Gazetteer of Taicang*, *Taicang zhouzhi* 太倉州志 contains detailed information regarding the frequent occurrence of banditry and armed conflicts in the Yangzi River estuary region; these accounts provide clear evidence for a well-established pattern of bloody feuds and fights involving fishermen, salt-brokers, gangsters and government officials before the *Wokou* Campaign. In the Yangzi River estuary region, imperial Ming government's rule was deeply compromised by the collusion of local and provincial officials